

3 2008
March

弘前大学

学園だより

題字：遠藤正彦 学長

VOL.158

CONTENTS

- I 巻頭言 弘前大学長 2
遠藤正彦
- II 特集
「弘前大学を
去るにあたって」 4
- III 海外留学報告 27
- IV けいじばんコーナー 29
- V 編集後記 30



制作 教育学部学生 櫻田七菜子

特集
「弘前大学を去るにあたって」



I 巻頭言

弘前大学を去る学生 及び教職員の皆様へ

卒業生・修了生の皆さん、おめでとう

この3月、弘前大学の各学部を卒業する皆さん、また大学院の修士課程及び博士課程を修了する皆さん、学位記授与誠におめでとうございます。皆さんの卒業までの努力に敬意を表します。

皆さんは、旧国立大学の国立大学法人化、すなわち大学の改革を学生として身をもって体験しました。とはいっても、具体的に以前とどう変わってきたのかは分かりにくかったかも知れません。しかし、私の目から見ると、大学は確実に変わってきました。

一つは、教育のあり方です。大学の使命は、教育、研究及び社会貢献ですが、この法人化後、大学の使命の一つ・教育に対するウエイトが確実に増してきました。それは、大学が優れた大学生を如何に育てて社会に送り出すが評価の対象であり、それが大学間の競争の表れだからです。

本学は「卒業生の質を保証します」と明言しました。だから、良い学生を入学させるべく、本学の入学試験のあり方を毎年見直してきました。そし

て、教育は“教養教育”と“専門の基礎”とを重視するという目標を立てて、これを推し進めてきました。そして、社会性の向上と人間性の陶冶の立場から、基礎ゼミナールの強化と課外活動を篤励してきました。

その結果はどうでしょうか。何よりも、本学のこの教育の成果が挙げたためでしょうか。本学は数年前の全国的な就職事情低迷の時から高い就職率を得ていました。様々な国家試験も高い合格率です。そして公務員試験も高い合格率です。

課外活動でも、数年前あまりなかった体育系の全国優勝や文化系の全国コンクール優勝を始め、多くの上位入賞が目につきます。新聞は皆さんの地域活動やボランティア活動を掲載しています。卒論や学位論文で学会賞を受賞する人が増えています。

本学の学生諸君は、明らかに変わってきたことを実感しています。それは学生の皆さんの努力であり、それを指導した教員であり、それを支援した事務系・技術系の職員の共同連結作業の

結果です。

この度卒業・修了の皆さんは、「この弘前大学で学んで良かった」と実感しているのでしょうか。皆さんが学んだこの弘前大学を誇りとして、これから社会で活躍して欲しいと願います。

その皆さんを待ち受けている人が多数います。それは約5万人の本学卒業生・修了生です。東京、八戸始め全国各地に本学同窓会の支部組織があり、そこで同窓生は皆さんを待っています。皆さんのそこでの活躍は、母校弘前大学を光り輝かせるものであります。その証拠に、少子化が進み入学志願者が減っても、本学は皆さんのように全国から入学志願者を集めている全国区の大学であり続けています。それも皆さんの誇りの一つです。

皆さんは弘前大学卒業生であることを誇りとして全国で活躍するように、大きな声でエールを送ります。卒業・修了おめでとうございます。





学 長 遠 藤 正 彦

教員、事務系・技術系の職員の皆様 御定年退職おめでとうございます

3月末日をもって定年で御退職される教員及び事務系・技術系の職員の皆様、弘前大学職員としての使命を全うされての御退職、誠にありがとうございます。そして誠に御苦労様でした。

私は新制弘前大学が、創立されてから今日までの学園紛争、大学設置基準の大綱化による大学改革、そして大学の設置形態を変えた国立大学法人化の3つが、本学の危機であったと思います。本学は、この3つの危機の始めの2つを、構成員の努力と協力によって乗り越えて、今3つ目の国立大学法人化の完遂に向けて努力しているところです。

皆様方はこの3つの危機を大学の内外で経験してきました。特に国立大学法人化後の第1期中期目標の期間終了前評価（いわゆる暫定評価）を前にして、皆さんはその目標の完遂に向かって努力を重ねてきました。この期間終了前評価が第2期中期計画に対する資源配分の根拠になると伝えられています。

国立大学法人化そのものが自主自律を促し、評価と競争の上に立っています。しかし、本学は国立大学法人化時に既に少子・高齢化と過疎化による入学定員割れの危険性を持ち、脆弱な産業基盤のため産学官連携の不足等、大学間格差や地域間格差をかかえていました。このことを十分に理解した皆様の協力によって、じわりじわりと本学は前進してきました。

国立大学法人化の新しい体制には、皆さん方のアイデアにより監査室、人事苦情処理室、学生就職支援センター等、新しい仕組みをつくりました。文京町キャンパスも一新して、公園化が進み、藤崎農場内には津軽地方最大のチューリップ園ができました。こうして、弘前大学は予算の少ない中でも着実に新しく変わろうとしています。

こうした本学の前進を見る時、このたび御退職される皆様には“やりましたよ”という満足感がありだろうと思います。少ない予算の中で挙げてきた研究成果、元気になった大学生の就職率、また課外活動成果等、教員の

方々には教員としての満足、また国立大学法人化後の諸規則の制定や業務改善等事務系の方々には事務方としての満足、これらを御退職されるにあたり充実感として感じておられるでしょう。心から敬意を表します。

これを受け継ぐ後に残る者としての使命は、これを如何に発展させるかであります。既に、国立大学法人化後の各大学の評価と競争は、様々な種類の大学ランキングとして様々な出版物に取り上げられて、国立大学の競争をあらわしています。

そうなればこそ、少資源の本学も立ち向かわねばなりません。皆様方にも御退職後は、教員の方は名誉教授を囲む会や同窓会を通じて、そして事務系の方々にはOB鷹揚さくら会を通じて、本学を応援して欲しいと願っています。本学はきっと力強く発展してまいります。皆様の今後の御健勝を祈ります。



Ⅱ 特集「弘前大学を去るにあたって」

学部、大学院を卒業、修了する代表、並びに44名の定年退職者のうち30名の方から寄稿いただきました。

人文学部・人文社会学研究科

弘前大学を 定年でやめる



文化財論講座 教授
藤沼邦彦

弘前大学を定年でやめる。なんと嬉しいことであろう。もう講義はない、教授会もない、学生を点数で評価しなくともよい。でもなんとなく淋しい。もう講義はない。学生との対話もなくなる。このような中途半端な気持ちで揺れ動くのが定年というものであろう。

平成10年4月、宮城県多賀城跡調査研究所の所長から弘前大学人文学部の日本考古学担当の教授に転身し、大学院ができると人文社会学研究科（修士課程）・地域社会研究科（博士課程）なども兼任した。亀ヶ岡文化研究センターのセンター長も拝命した。そして今年の3月で定年をむかえる。10年間の教員生活であった。

弘前大学にきて1年目は、これまでの職場での環境とまったく違うので、精神的に落ち込み、大学をやめようかと思った。丹野先生など周囲の仲間（先生方）に大変な心配をかけた。大学病院の先生からは猫を飼ったらとか、エアロビクスを習ったらといわれた。一人でいると、暗

い闇の中に体が沈んでいくような感覚にとらわれ、不眠状態が続き、ガタガタ瘦せた。電話をかけることも、手紙を書くことも、1年間ほとんどしなかった。

2年目の後期から宮坂先生・鐘江先生と一緒に考古学実習を始めると、学生が沢山集まり、身辺が急に賑やかになった。実習の資料を集めるために、学生と一緒に忙しい日々をおくり、いつのまにか元気を取り戻した。このことで私は今でも学生に感謝している。その後は、専ら亀ヶ岡文化の優れた資料を借り集め、考古学実習室で学生と一緒にいろいろなことを調べる毎日であった。遠山文部科学大臣が実習室に來られ、石刀などを手にとって鑑賞していったこともある。予算がないので関根先生とポケットマネーを出し合い、沢山の学生と泊り込んで、津軽半島の今津遺跡を発掘したのも面白かった。この時の出土品は、亀ヶ岡文化研究センターの重要な展示品となった。

私のゼミの卒業生は40人に満たない。みな元気である。亀ヶ岡文化研究センター開設記念の展示には、九州や関東など遠いところから卒業生も駆けつけてくれた。考古学ゼミは教員も学生もいつも忙しい。その割には、あっちこっちに出かけ遺跡や博物館を見たり、食事をしている。今年だけでも10人ほどの学生と一緒に函館、仙台・松島、一戸・八戸、東京・山梨・長野・名古屋、北秋田の森吉山麓に出かけた。岩木

山頂にも登ったが、これが今年一番面白かったことである。白神の十二湖の青池にも行った。実習では関根先生の運転で宮城県の多賀城跡・雷神山古墳・瑞巖寺・里浜貝塚・大木冨貝塚などを見学した。

学生のために文化財関係の小さな展示室を作りたい。赴任の時から夢であった。そこで考古学実習室に良質な資料を借り集めて学生に見せることから始めた。今津遺跡の出土品などを並べて、大学祭で考古学実習室を公開したところ、3年間（延べ9日間）で約1400人が入場し、学生達がこうした施設に飢えていることを知った。亀ヶ岡文化研究センターの設立は、展示室をつくるチャンスであった。これには薫科学部長の尽力があった。センターの運営は大変であったが面白かった。2回おこなったミニ特別展は大当たりで、市民も喜んでくれた。亀ヶ岡式土器の文様の研究に熱中し、研究報告を7冊作った。

4月からは仙台での生活が始まる。仲間と陶磁器・刀装具・古鏡、漆器、絵馬、アイヌの民具などに触れながら、そして楽しみながら勉強し、できれば沢山の美しい本を作りたいと思っている。では、みなさん、さようなら。弘前大学では、学長から学生まで本当に沢山の方々にお世話になりました。有り難うございました。仙台の我が家にも遊びにきて下さい。ではもう一度、さようなら。





弘前大学での 6年間で得た もの



人文社会科学部
応用社会科学専攻
天 内 慎 也

私の弘前大学での大学・大学院生活を振り返るとき、キーワードは「下宿生活」、「ゼミナール」、「教育実習」の3つだと思います。

大学時代の4年間の「下宿生活」

では、いろいろな人に出会いました。私は県内出身なので、県外出身者と話をするのは大変有意義でした。また、浪人して弘大に入学した人からは、勉学に取り組む姿勢を学びました。テスト前には、下宿生同士で分からないところを教えあったこともいい思い出となっています。

ゼミナールでは、「人」に恵まれたと思います。先生をはじめ、ゼミの先輩・後輩もみんな良い人ばかりで、ゼミでの4年間をととても楽しく、充実したものにできたと思います。これからも「明るく」、「楽しい」ゼミであることを願っています。

「教育実習」では、多くのことを

学びました。教える立場に立つことで、これまでの教育に関する考え方・見方を一変させられた気がします。多面的に物事を考えることの大切さを学びました。

このように、弘前大学での6年間で様々な経験をすることができました。こうした経験の一つ一つが私の財産となっています。これからは社会人として、弘前大学で学んだ6年間を忘れずに頑張っていきたいと思っています。

最後に、弘前大学での大学・大学院生活を支えてくれた両親、6年間でお世話になった全ての人達に一言。「ありがとう!!」

また、来ます。



人文学部 人間文化課程
宮 本 みつる

弘前大学に入学して、夢のように四年間は過ぎた。かけがえのない時間をこの弘前という土地で過ごすことができ、とても幸せだったと感じ

ている。憧れだった弘前大学、合格した喜びは今でも覚えている。講義はどれも新鮮で、勉強したいことは片っ端から受けていた。たくさんの興味と知識は、私を大きく成長させた。きっと後にも先もあんなに勉強することはない。特に三年生になり、ゼミが始まるとそれは顕著に現れた。それまで受けていた授業とは違う責任感、社会に出て働く予行練習となった。もう一度やれと言われたら涙が出そうだが、あのような経験は今後もきっと私を助けるだろう。

そして一年生から始めた大学生協

学生会委員会は、生活の大部分を占めた。多くの人と出会い、私は大学生活での生き甲斐を見つけた。講義からでは得られない多くのものを身につけていった。活動の指針は私の就職先を決める指針ともなった。お世話になった職員の皆様、同期に深く感謝を申し上げる。

人生でおそらく最後になるであろう学生生活を、この弘前大学で過ごした四年間を私は一生忘れない。この地を離れることは本当に悲しくて仕方ない。しかし、第二の故郷である弘前は、いつまでも近くにあるのだ。また、来ます。

大学時代、 自分との 和解



人文学部 人間文化課程
木 村 奈 月

4年間はとても短い。ついこの前入学したばかりなのに、と時間の流

れの速さに驚く。振り返ってみればいろいろな出来事とともに自分の成長を感じ取ることができる。

私は子供のころから心配性で何をしても悩んでばかりいた。即断即決できない自分に苛々としていた。大学生活で得たもので大きかったのは、そのように自分を否定してばかりでなく、自分を受け入れることができるようになったことである。

それを可能にしたのは大学の自由さだと思う。他人から与えられるこ

とをするのではなく自分で何をするか決めなくてはいけない。どの授業をとるか、それは将来どのゼミに入るか、そして卒業後どのような道を選ぶのかにも係わってくるから、私は自然と自分の過去と未来について考えざるをえなくなった。

おそらくこれほどまでに自分の好きなことに熱中できて、そして自分と真剣に向き合った時期はなかった。思うに大学時代というのは子供から大人になるのだという自覚を持



つべき時であり、社会に出て恥じない人間になれるようにしっかりと考える時期である。

3年くらい前までは働きたくない

と現実逃避していた私が、社員になると決め就活に励んだ心境の変化はその結果だろう。今では自分の悩むという行為も次の段階へと進むた

めの準備だと考えるようになった。これからも、納得できる将来を歩むために存分に悩もうと思っている。

大学生活 ≒ゼミ



人文学部 情報マネジメント課程
小枝 裕幸

卒研が一段落したこの時期に「卒業にあたって」というのも、早すぎて微妙なのですが、色々考えてみて、自分のゼミの事を書くことにします。

大学一、二年の頃はボケっとしていて「このまま大学生生活も終わるんだろう」とゆとりをもって構えていましたが、三年次にゼミに所属してから、ゆとり教育プランは廃止になりました。

最初に希望したゼミでは先生自ら「ウチは厳しいよ」と仰いました。他のゼミに逃亡を図ったのですが、そちらのゼミの先生にいきさつを話すと「厳しさから逃げちゃダメだ!」とあっさり断られました。結果的に希望通り(?)最初のゼミへの所属になりました。

厳しいとか言っても実は優しい「ツンデレだ」と思いこもうとし、現実

逃避を試みましたが、どう考えてもゼミは「ツン」でした。ゼミ前日は仲間と徹夜が当たり前でした。でもその仲間のおかげで何とかゼミ生活を乗り切る事ができました。

今のゼミに入って得たものは多分「自信」だと思います。先生は「ゼミがきつい?社会人はこんなもんやないでえ!」的な事を仰いますが、確かにゼミでの経験によって、将来踏ん張りがきくようになると思います。それほど濃い二年間でした。

最後に先生やゼミの仲間、自分と関わった人全てに感謝の意を表してこの駄文を締めたいと思います。

教育学部・教育学研究科

ありがとう ございました



社会科教育講座 教授
矢島 忠夫

ここで半生を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

そのおぼつかない思考の軌跡をたどってみようと思います。

誰も自分自身が疎遠な思いを懐くことはあるのでしょうか。そんなとき、世界も疎遠な姿を見せるでしょう。

現象学的には、世界は意味として、あるいは意味づけられたものと

して構成されています。その意味を構成する「わたし」もまた、自分自身の今すぐを待ち受け、只今に立ち会い、今し方を引き留めつつ構成される流れ、自己自身と差異することです。哲学する「わたし」は、名付けようもなく立ち現れる見知らぬ「それ」に、つねにすでに立ち遅れ、その根源的な「それ」を、事後的に「わたし」と名付けているだけでした。

哲学すること、根源的であること、初めから始めることが情熱になりうるとすれば、哲学する「わたし」の存在が揺り動かされ、それが、すでに、危機としてではなく解放として、悲しみとしてではなく喜びとして体験されているからでしょう。人間「わたし」の外部、共同体の誰とも同類ではないわたし、比類なき哲学的孤独、異形のわたし、

「それ」への帰還が情熱になりうるとすれば、人間「わたし」のただなかに、その外部、「それ」が、危機としてではなく解放として立ち現れているからなのでしょう。

根源的な自己構成の流れ、「それ」は、「自己自身と同一する実体的なもの」ではなく、「自己自身と差異すること」「異(=事)(こと)成ること」「出来事」です。本性上「同一のもの」が、「変化すること」、「別のものに成ること」がありえないとすれば、「ものが存在している」のではなく、「事が起こっている」と考えるほかないわけです。

「為すこと」(行為)も一つの「成ること」(出来事)です。あるいは、行為を含む出来事が、まるごとの出来事、世界です。同じように行為する人に、同じような世界が立ち現れるとすれば、そのためでしょう。

「時はすでに有である、有はみな時である」と言われたことも、この意味で理解しようと思っています。

たどたどしい軌跡でしたが、わずかでも、自分自身との、世界との親密さが増したようにも思われます。

この時を過ごさせてくださったすべての人に感謝しています。

共に学んだ 31年間



美術教育講座 教授
岡田 敬司

昭和51年（1976年）10月1日弘前大学教育学部美術科教室教員として赴任した。

平成20年（2008年）3月31日美術教育講座・彫刻（工芸）の教員を定年退職します。

31年前の教育学部教授会で着任の挨拶をした。「学生と共に学んで行きます。」であった。そして今、

そのようにして来られたことをとても感謝している。着任時の任務は、教育・研究であり「地域貢献」は今ほど強く意識されていなかったように思う。

教育面では、美術好き、彫刻好き、陶芸好きの学生さんの種々の要望に応えることができて良かった。卒業・修了制作（研究）指導では、学生・院生達の多様な要望に応じてやらねばならない教育学部の実技に係わる面でのスペース不足や設備整備の限界と大変さをいつも感じていた。それでも学生達の屈託のない笑顔や笑い声に救われた思いがたびたびあった。研究面では、彫刻・陶芸いずれの世界もその困難さと同時に、計り知れない魅力の深さ、高みにいささかなりとも触れることができてとても良かったし、今後の展望

が持ててよかった。運営面では、教育学部附属小学校長として、平成15年から3年間お世話になって、元気な先生方、事務の方がた、子どもたちから行事などを通じてパワーと愉しさと晴朗、清々しさなどを与えられた。これからも、一層、弘前大学が遠方からも受験生を招来できる魅力ある大学として、全国・世界に向かって優れたプランと実践力を発信し続けられることを願っています。色々な先輩や同僚の先生方はたまた学生たちからも、活力を頂くことができ、心から感謝しています。事務方の皆様、その他係わりのあった多くの皆様、長い間、本当にお世話になりました。ありがとうございました。

マラソンの 勤務期間で 感じたこと



教育保健講座 教授
佐藤 光毅

赴任は、助手として昭和41年4月です。勤務年数は42年ということになります。1年を1kmとすれば42kmとなり、マラソンの距離には195m不足します。日数にすると71.2日の不足です。したがって、マラソンの勤務年数とでもいえると思います。以下に、マラソンの勤務年数の中で印象にある3点について記憶をたどってみたいと思います。

四十二年前、小学校専門体育（実技：器械運動、当時はマットが少なく場所もなく外の鉄棒だけの実施）で女子の逆上がり、足掛け上りの出来ない学生が多いことで、つい声を立てて笑ってしまいました。当時の担当教官の岩淵直作先生（平成17年逝去）から「このような学生を出来るようにするのが教育学部の指導だ」といわれ、さらに厳しい注意を受けました。それ以後、学習者の出来る動作の探りと課題との関連、体格・体力のレベルとその力をどのように発揮させるかなど指導手順を常に考慮し実施するようにしています。

二十年ほど前、小学校課程の学生から真面目な顔で体育の先生は「筋肉で考えているのか」という意味合いのことを言われました。これは問題である、運動の学習と習得過程を

理論的に理解させないと教育現場に立った場合、大きな問題になると強く感じました。筋肉は種々の刺激を感じることは出来ても考えることは出来ない。運動を習得していく課程での身体の活動、たとえば、骨格筋は随意筋であり脳からの命令がないと活動はなく、その第1条件としては正しい命令が必要ということ、などの理解が必要です。このような感じ取りと組み立ての混同に対する、正しい知識と身体での感じ取りの指導が必要と感じられました。

三年前、平成18年8月に日本体育学会第57回大会を主管・開催（日本体育学会青秋支部、会場：弘前大学）しました。この学会は学会員6千人を越すマンモス学会です。この時、会員がいる保健体育講座と教育保健講座の個人の力とチームプレイ（補助学生を含む）が問われるとい



うことを強く感じさせられました。この後、学会大会の開催に関する理事会において、小さな支部・スタッフが少ないという理由だけでは断れなくなってきました。

今、学習者が上手く出来ない場面における指導については、まず第1に何がわからないのかをわかる力が必要ということと、生きる力としては、ヒトは独りでは人間にあらず、

ヒトはヒトと交わって人間になれるという協調力の必要性を強く感じています。

今、思うこと



事務長
佐藤 正彦

還暦を迎え、そして長年勤めてきた弘前大学での事務職を定年退職することになります。生まれこれまで60年、その大半である39年余を弘前の地、弘前大学でお世話になりました。自分という限られた世界、限られた歴史の中ですが一つの大きな節目を今迎えるところです。

青森市で育ち、高校を終えました。青森市とはいっても東の端、陸奥湾に面した村里です。当時、若気の至りでしょうか。或いはある種の息苦しさ、閉塞感からでしょうか。ひたすら親元を離れることを考え、時代の後押しもあったかと思えます

が、学校を終えたその月に上野行きの特急列車で旅立つことになったものです。18歳でいきなり田舎から出て、人間の多さ、物事のスピードには驚き入ったものの、周りからの干渉がない独り立ちした生活、目にするあこがれていた風景、すべて新しくかっこいい対象に楽しい日々を過ごさせていただきました。

けれども、世の中うまくばかりは運びません。事情もあり、上京後いくらか経ずにUターンを余儀なくされ、ふるさとでのニート生活と相成ります。しばらくは気楽にブラブラしていましたが、さすがに、親に負担を掛けてばかりではいられないと気がきます。また、狭い土地柄人の目も気になりだした頃、巡り合わせと運が重なり、公務員として弘前大学に勤務することになりました。

就職した当初、弘前の落ち着いた和やかな雰囲気自分を迎えてくれました。特に印象に残っているのが冬場の雪です。青森では毎日が吹雪、横なぐりに雪が吹き付けてきま

すが、繁華街土手町では上から雪がひらひらと優しく降りてきます。何故かその光景が今も目に焼き付いて離れません。一方、大学では学園紛争の最中でした。デモや建物封鎖、そして遂には機動隊導入に至るなど物情騒然としておりました。そんな中での自分はというと、職分、責務を勝手に判断し、周囲の事情を深く考えることもなく突っ走るという思い上がった独善的な日頃の態度でありました。為すべきことを成しさえすれば、善くも悪くも結果は後からついてくるといった感覚です。

そして長い歳月を経た今、定年退職というまげることのできない事実に向き合い、自分がどこかに所属している、周りに仲間がいるという何にもかえ難い温かな安心感と大きな財産を大学を通して直接、間接に与えられてきたことに感謝しながら、新たな生活に向き合っていきたいと願っています。

南部衆奮戦記

総務グループ係長
久保田 豊治

成績が良過ぎて？敬遠されたのであろうか、採用は同期の皆さんより遅れて5月採用であった。自炊する

勇氣も自信もなく、叔父の助けを借り、朝夕2食付きの下宿屋に収まったのである。南部弁で育った者にとって、津軽弁は早くてわかりづらく、同じ県内とはいえ異郷の感があった。その後津軽弁を駆使するようになり違和感を感じなくなっていたところ、弘前で生まれ育った子供に対し、他の方から、ことばに南部のなまりが入っているとされた時

には、生まれ育ちは隠せないものとあきらめたのであった。

職場の皆さんには、南部弁と津軽弁のコラボレーションに長らくお付き合いをいただきましたこと、この紙面を借りて感謝する次第です。ありがとうございました。

6年間の財産



教育学研究科 教科教育専攻
工藤 真澄

ついにこの春で6年にわたる学生生活が終わりを迎えることになった。この6年間で私が身につけたことは何だろうかと考えたとき、それはとても平凡で些細なことかもしれないと思う。

「倒れるときは前のめりだ」これは私の恩師にあたる指導教員が冗談半分で言っていた言葉である。でも私はこの言葉に妙に感銘を受けた。

倒れる最後の最後まで一歩でも前に進もうという気持ちがそこには隠れている。たしかに考えてみれば、しりもちというのは全力疾走している状態や、力いっぱい前進しようとしている状態からは起こりえない姿勢ではないだろうか。前のめりに倒れる姿はがむしゃらすぎて恥ずかしいと思う人もいるだろう。しかし私はそこであきらめては女が廃る！とってしまうのだ。「前のめり」すぎて心配になるほど働いている恩師の背中を見ながら過ごした6年間で、私の中にその精神はいつのまにかしっかりと受け継がれてしまったのかもしれない。そして修士課程で過ごした日々は、そうやって前のめりに生きていくのは「案外楽しい」ということを体感できる2年間だった。

学生生活が終わり社会に出ること

は、私にとって楽しみでもあり少し寂しくもある。私の学生期間は人よりも少し長かったが、やり残したことはたくさんあるような気がしている。ただ不思議なことに後悔はまったくない。たくさんの人に囲まれ助け合い笑った、これ以上の学生生活はほかにはないと思うことが出来る。取り立てて大きな成果を挙げたということはないが、小さな幸せをたくさん集めることができた。「前のめり」になっても倒れずにここまで来ることが出来たのは、私の周りにいてくれたみなさまのおかげである。これからもそんな大切な人たちと、遠くにいても近くにいても肩を組んでいるつもりで歩いていきたい。前のめりに。一歩でも前へ。



指導教員の佐藤学部長と

大学で考えた「今を生きる」という生き方

教育学部 学校教育養成課程
成田 悠仁

この原稿を見ていると、突然「卒業」の二文字が形となって自分に向かって走り寄ってくるような気がしてきます。科室で仲間と卒論について愚痴りあったり、サークルで楽器をいじったり、月曜から西弘で飲んだりできなくなってしまうのだという実感は、まだわきません。「慣性

の法則」という有名な法則がありますが、人間、現状を維持したいと思うのは、自然なことなのかもしれません。けれども、そんな生き方は少々魅力にかけると思います。私は「カサブランカ」という映画の中に登場する「That's so long ago I don't remember.」「I never make plans that far ahead.」という台詞が大好きです。映画の台詞にはいろいろな含みがあるのですが、単純に、「そんな昔のことは覚えてないね」「そんな先のことはわからない」という意味です。思い出にすがっているように思われるのは嫌いですし、先々まで計算して生きるのは、どうにも性に合いません。例えば、ツーリングは自分の中でかっこよい生き方です。バイクは、バックできませんし、走っていないと倒れてしまいます。行き先は、たまに道路標識が教えてくれますし、道は無数にありますから、どの道を通っても

きっとローマにつながっているはずですよ。そういう意味で、大学は、変化に富んだ道がたくさん通っていて、景色もよく、一緒に走ってくれる仲間も多く、天気は気まぐれでしたが、ずいぶん気持ちのよいところですよ。一番のよさは、時間にせかされずに好きな道を自由に走る余裕があるところです。パトカーもあまりいませんしね。私は大学を抜けて、来春から幸いにも小学校教師という新たなところをひた走っていくこととなります。気がつけば、仲間はそれぞれの行き先へ散ってしまいましたし、お世話になった先生方を残してきてしまいました。ですが、過去を振り返って「見る」つもりはありません。小石に躓いてしまいます。万一過去に戻りたくなったら「Back to the Future」という映画を思い出すようにします。



津軽を満喫 した4年間



教育学部 生涯教育課程
加藤 千草

地元の埼玉から弘前へ来て、大学4年間で成し遂げようと決意していたことがあります。それは、津軽の文化を満喫すること、足をつかって勉強することです。弘前に来て初めて聴いた津軽三味線。たった三本の弦から流れる音色の奥深さと、それを奏でる高い技術に惹き付けられ、入学してから市内の津軽三味線教室

で習いはじめました。今では毎日弾かなければ気がすまないほど津軽三味線にのめりこんでいます。学内では津軽三味線サークルに所属し、全国各地から集まる個性豊かなメンバーと出逢い、お客さんの前で演奏するたくさんの機会に恵まれました。また、「地域の人と関る」ことをモットーとする北原啓司先生の研究室に入ったことも、私の大学生活の中で欠かせない出来事です。研究室の恒例行事である百石町夜店祭りなどの地域活動への参加は、地域の人と一緒に活動し、人々の思いを肌で感じる貴重な経験となりました。グリーンツーリズムをテーマとする卒業研究にあたっては、先進地研究として青森県南部町に通い、さらに昨年の夏休みには北は北海道十勝地域から、南は九州大分県まで足を運

び、全く異なる地域の実態を知ることができました。環境も地域づくりの方法も異なりながらも、どの地域でも地元を愛し地域づくりに一心に取り組む人々の姿がありました。予想していた以上に多くの地域に出かけ、地域づくりについて身をもって学び、卒業研究に取組めたことを幸せに思っています。こうした数多くの機会を提供していただいた北原先生、そしてお世話になったたくさんの地域の方々には本当に感謝しています。

私にとって弘前大学での生活は、まさに入学当初の決意を実現するものであり、それ以上に多くの経験を積むことができた、実りある4年間だったと感じています。

医学研究科・医学部

定年退職にあたり

神経解剖・細胞組織学講座 教授
正村 和彦

私は昭和56年5月に弘前大学に転任してきました。以来、26年間弘前大学の多くの人々から過分なお力添えと励ましをいただき、満ち足りた年月を送ることができました。これに対して、弘前大学にどれだけ貢献できたかを思う時、申し訳ないという気持ちでいっぱいです。私としては最大努力をしたつもりです。努力のすべてが成果に結びつくものではないことは皆様よく御承知ですので、お許しただけかと思えます。

せめて、弘前大学に何か提言でもしようかと思えます。役に立ちそうもなければ無視していただいて結構

です。

(1) 21世紀教育の授業をすると、学生の多くは高等学校の学習内容を十分に修得していないとの印象を受けます。入学時にすべての学部へ共通の学力試験を行って、またはセンター試験の成績を利用して、成績によってクラス分けし、21世紀教育の最初の1年を高等学校の学力の補充に当てるのはいかがでしょうか。全学部共通試験科目として英語、国語、これに理系は理科2科目、文系は社会2科目を課し、第1年目の教育は高等学校レベルの学力を充分につけることを目的とします。教科書は高等学校で使用したものでよいと思います。第1学年の終わりに学力試験を行い、第2学年への進級判定の材料にすることも可能と思います。

(2) 私は定年前1年6ヶ月間、附属図書館のリリーフ館長を勤めましたが、電子ジャーナルの確保・維持に苦慮しました。弘前大学が教育以

外に研究も重視するならば、大学機能の基盤として、これらの充実と安定維持は不可欠だと思います。電子ジャーナルは図書館に行かなくても、卓上のコンピューターから必要な学術資料が得られる便利さだけではありません。もっと重要なのは、自分の狭い専門分野以外の広範囲領域の情報に迅速にアクセス出来ることです。研究には着想がもっとも重要です。これは多くの異質な情報が研究者の脳の中で結合・統合されて初めて生まれるものです。薬品をかき混ぜても生まれません。電子ジャーナルが普及してから、私は表紙も見ることがない雑誌の論文を引用するようになりました。アイザック・ニュートンのよく知られた言葉、「もし私が他の人より遠くを見ているとしたら、それは巨人の肩の上に立っているからだ」、があります。現代の巨人とは電子情報です。

他のいくつかの提言はここで述べるには適しないので、別の機会にい



たします。
最後に、弘前大学がますます健全

な発展をし、輝くことをお祈り申し
上げます。長い間、有難うございま

した。皆さん、お元気で、さようなら。

定年雑感



法医学講座 講師
北 武

昭和42年4月に弘前大学医学部法医学教室の助手として採用されてから41年の研究生活を送ってきました。早いもので3月には定年退職することになりました。研究、スポーツ、アメリカでの研究等、思い出の多い在職でありました。

昭和42年は古い木造の研究棟から新しい鉄筋コンクリートの研究棟に移った年で、真新しい実験室で研究を始めることができたことは、ある意味ではラッキーだったと思います。只今、41年目にして研究棟の改修工事を行っています。私の定年退職と同時に改修工事による模様替えが行われたことに、何かの因果を感じずにはられません。

私が法医学の助手の頃、講師でおられた田島 強先生に法医学のノウハウを教えていただきました。私の最初の研究は Coombs test についてでした。当時の Coombs test は

非特異的反応が頻繁に認められ、先ず Coombs 血清を作るところから始め、これが私の最初の動物免疫となりました。いわゆるウサギ赤血球をヒト血清で感作し、その感作赤血球をウサギに戻すという方法で Coombs 血清を作製しました。この抗血清を用いて学会で発表したのが最初であります。

この Coombs test の手技を様々な工夫し、非常に弱い抗体感作血液でも正確に判定できるようになりました。ちなみに第一内科（松永内科）外来患者では100例中4～5例位陽性であったことを思い出します。その後、血漿蛋白の研究をすることになり、当時、複合体免疫法を考案し、24種類の血漿蛋白に対する特異抗血清を作製、次々と24種類の正常値を明らかにすることができました。また血漿蛋白には数十種類の血清型が存在しますが、血清型とその蛋白量との関係についても学会等で多く発表することができました。

1984年9月よりアメリカ合衆国、UCLA に Fellow として2年間留学、その時に Dot-ELISA による ABO 式血液型判定を研究しました。この ELISA 法は、帰国後人血証明法に応用して、法医学の国内および国際学会で発表しました。アメリカ合衆国滞在最後の2カ月は、自

動車で45日間をかけアメリカ合衆国を一周しました。その距離は約23,500km で、当時そのラボで一周を成し遂げたのは私のみで、皆に驚かれたことを懐かしく思い出します。

スポーツ面においては、カヌーで2004年陸奥湾単独横断（夏泊半島から下北・川内町）、2005年62歳で津軽海峡単独横断（下北・大間崎から函館・戸井漁港）に成功しました。大間崎から戸井までのコースは潮の流れが速く、カヌーでの横断は困難だといわれていますが、天候にも恵まれ成功することが出来ました。

その後の研究は、消化器粘膜からの ABO 式血液型判定で、高度の腐敗にも関わらず、2005年に考案した胃粘膜固定法と当教室、元教授赤石英先生（1965年）が開発した型的二重結合反応法により確実、かつ短時間に ABO 式血液型判定ができました。黒田直人教授のあるヒントがきっかけで胃粘膜固定法を考案し、大先輩が約40年前に考案された型的二重結合反応法を用いて胃粘膜からの血液型判定ができたことが、私にとって一生忘れられない大成果となりました。

最後に、弘前大学の将来を担う若者の研究の場としての益々の発展とご活躍を心から祈念致します。

定年退職を迎えて



消化器外科学講座 教授
佐々木 睦男

このたび「学園だより」から「退職するにあたって」との題で原稿の依頼があり、「もうそんな時期になったのか」と複雑な思いがありますが、最近感じていることを述べたい。

私は昭和43年に本学医学部を卒業、インターン制度廃止による約1年間の「自主研修」後に、当時の第二外科学教室に入局しました。それ

から約40年が経過したことになりますが、時の早さと社会の急激な変化を再認識する一方で、その変化への自身の対応が適切であったか、自問自答しているところです。この間、私の周辺では国立大学の独立行政法人化をはじめとし、学部および卒後の教育改革、医療を含む社会環境が激変しました。過去約10年間（教授在任期間）に限って見ても、



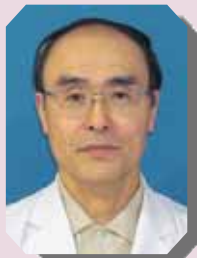
予想もつかない事が次々に提起され、社会的な混乱も引き起こされました。現在、その傾向は少し落ち着きを取り戻しつつあるようですが、一連の変革の影響は大きく、社会はいまだその余波に揺れ動いています。これまでの改革の評価については今後に残された点もありますが、本学医学部は医師の育成という立場からみると大変厳しい環境におかれています。特に、社会問題化している医師不足や地域医療の崩壊等は青森県では顕在化しており、その要因の一つとして卒後臨床教育制度の影響をまともに受けている事実があります。これまでの医師育成制度のマ

イナスの面を改善する目的で登場した新しい卒後臨床研修制度は、医療過疎に悩む地方の更なる医師不足と、結果的に地域医療を崩壊させ、住民への医療サービスの低下につながっているわけであります。臨床研修医の地方から都会へ流出する原因はいろいろ指摘されているが、教育病院や環境問題もさることながら、もっと別のところに原因があると思われま。この問題は臨床研修医に限らず、現在の日本における社会資本の流れと連動しており、中央への一極集中が続いていることから明白であります。本県においては今後、医師不足の傾向は当分の間続く

ことが予想され、加えて少子高齢化や人口減少は一層顕著になり、その結果、医療格差はさらに増大することが懸念されます。本県では、がん死亡率や乳児死亡率等の指標が極めて高いと報告されておりますが、現実的に見ても地域医療は壊滅の瀬戸際にあります。このような状況を改善するためには、大学教職員のみならず行政を含め地域医療に携わる全員が現実を認識し、「同じ視点」で取り組んでいくことが重要であろう。

最近の急激な医療状況の変化に直面し、退職直前の感想として一言述べさせていただきます。

退職にあたり



附属病院放射線部診療放射線技師長
工藤 亮裕

昭和47年4月弘前大学医学部附属診療放射線技師学校を卒業して、中央放射線部に籍を置いてからこの3月で36年になります。過ぎてしまえば短くも感じられるこれらの日々も、一日一日のさまざまな出来事の積み重ねであり、思い起こせばいまだに冷や汗を禁じ得えないなど、実に考え深いものがあります。

放射線技師人生の前半で思い起こすことは、昭和51年4月に放射線取扱主任者として専任されたため、診療放射線技師との二足のわらじを履くことになったことです。当時の核医学検査は各診療科が単独で検査を行っていた時代でした。例えば、内科系では肝臓、脾臓、腎臓、甲状腺検査を、外科系では肺、胆道系の

検査を主に行っており、我々放射線技師と担当医師とで日夜検査法の確立のため研究に熱中していた時代でした。医師の中からは博士論文として核医学を選ばれる方も現れ、数回博士論文授与後のパーティに招かれたことは楽しい思い出となっております。

放射線管理で思い出すのは、ラジウム針による舌ガンの治療中に、患者さんが舌に刺入しているラジウム針を自分で抜き、病室中にまき散らすという不測の事態が発生したことです。弘前公園の桜祭りではほろ酔い気分ポケットベルが鳴ったため、病院へ電話を入れると、受話器の向こうは当時の放射線部長の声です。大至急病院への指示に、どういう顔でRI病棟へ駆けつけ、サーベイを行ったかは今では思い出せませんが、幸いラジウム針は床頭台の引き出しやゴミ箱、ベッドの布団の中等から全てを回収することができ、事なきを得たことを冷や汗と共に思い出します。

後半での思い出は、平成13年に技師長職を拝命したことです。当時、放射線部は新築になった中央診療棟へ移動し、大半の装置は真新し

い装置に更新され、意気揚々と診療を開始したものでした。その後、国立大学の法人化による勤務体制の大幅な変更、中期目標・中期計画案の作成、ISOの取得と医療安全への取り組み等、これまでにない課題を一つずつ放射線部員が一丸となって取り組んできた7年間でした。

平成15年10月には、全国大学病院医療スタッフの一員として米国の医療施設の海外実地視察に参加する機会を得たことも、大きな収穫の一つでした。参加者同士で同窓会を設立し、現在も活発に交流が続いていることは私の大きな宝の一つとなりました。

36年間大過なく退職の日を迎えることができるのは、私を支えて頂いた家族、友人、同僚の技師、大学職員の方々に、それに歴代の部長の支えがあったからと感謝しております。心から感謝を申し上げますと共に、弘前大学が地域において先駆的な役割を果たし、これからも益々発展されますことを心から祈念申し上げます。

退職にあたり

臨床中央研究室 検査助手
松本 智恵

昭和44年臨床中央研究室に採用
になり、38年の歳月が過ぎたのか

と、改めて年月の経過の早さを嘖み
しめています。

その当時の研究棟は、今にも崩れ
そうな木造の2階建て、冬は石炭ス
トープを囲んでの語り合い、和やか
だったあの頃が大変懐かしく思い出
されます。

その後、今の研究棟に移り、1階
にあった動物施設が水害に遭い、泥
に埋もれて実験中の動物が全滅した

事など……その時々のお出来事に思
いを馳せると感慨深いものがありま
す。

臨床講座教授の方々には、折に触
れて適切なご指導をいただき、無事
に勤めを終えることができました。

お世話になりました皆様には心か
ら感謝申し上げます。

退職にあたり 思い出の一ページ

看護部 看護部長
福沢 百合子

団魂の世代と言われる私達です
が、私も3月に退職となりました。
弘前大学医学部附属病院に看護師と
して入職してから約36年間お世話
になりました。最初の職場は中央手
術部から出発し、救急部との合同体
制では小児科の心臓疾患患者の看護
や、桜祭り期間には本学のアルコール
酩酊学生を何人か見たこともあり
ました。集中治療部・放射線科病
棟・小児科病棟・材料部を経験後、
平成17年から再度手術部に看護師

長として勤務しました。

看護人生の半分以上を手術部で勤
務したことになります。

近年、知識・技術とともに医療の
高度化や重症化を背景に看護ケアも
複雑化してきています。手術部にお
いても手術器械の進歩の目覚しさに
驚かされるばかりです。最近では内視
鏡手術の進歩が話題ではないでしょ
うか。手術部にも内視鏡手術室の改
築がなされました。着々と器械の準
備も進み、看護師も事前の学習に日
夜奔走しています。また、器械の管
理など業務の拡大にも苦慮している
ところです。患者様が安心して安全
に手術を受けられるためには、手術
に携わる全てのスタッフがお互いに
コミュニケーションを図り、意思疎
通を充分とることが必要と考えてお
ります。

忙しさの中でも最近、某教授と昔
のことをお話することがありまし
た。昭和50年代は手術場には時間
的に余裕があり、担当の手術器械を
自分でセットすることで学習するこ
とができました。医師や先輩達から
教えていただいた器械だしのコツや
社会人としての心得など、また、手
術場の大忘年会は有名で、全診療科
の医師達と和気藹々と楽しく、良き
時代だったと思ひ出します。業務の
中には危険なことも多々ありまし
た。それが現在の医療器械の進歩で
解決されてきています。私は弘前大
学附属病院の進化に、その時々によ
りとも関わってきたことを幸せ
に感じております。また、これまで
ご指導下さいました皆様に深謝いた
します。

思い出



附属病院看護部（一病棟二階） 看護師
成田 チヨ

私が、当院に勤務したのは昭和四
十八年四月でした。

最初は旧二病棟五階小児科に3年

勤務、その後、旧三病棟五階皮膚
科・形成外科・歯科口腔外科の混合
病棟に勤務しました。S58年には
皮膚科外来に移動しました。

現在の二病棟が新しく完成し、二
病棟七階眼科勤務となりました。
H10年には一病棟二階に配置替え
となり、放射線科と ICTU の混合病
棟でした。ここでは、放射線科看護
や化学療法の看護を経験しました。
7月には同病棟に老年科が開設され
たため、幅広い看護領域を経験す
ることができました。

社会の激変や医学のめざましい進

歩のなかで、三十五年間勤務させて
頂きました。長いような、短いよ
うな年月でしたが、その間には、い
ろんな事がありました。なかでも忘れ
られないことは、S52年の水害、
新病棟移転、眼科病棟の流行性角結
膜炎発生で、病棟閉鎖状態になった
事でした。また、看護部自治会主催
のレクリエーションで行われたひな祭
り、子供達をつれての青空研修会な
ど走馬灯のように蘇ります。

近年では、コンピューターの導入
で大幅に業務改善が行われ、入職時
のなんでも「手書き」から「入力と



出力」の時代に変化しました。最初はお手上げ状態でしたが、周囲の支えと自己努力で対応できるようになりました。

私は、今まで7人の看護部長と9人の看護師長、大勢の看護師仲間と共に勤務しました。看護方式の変更や、付き添い廃止、また、今年度からは7：1の看護体制のためスタッ

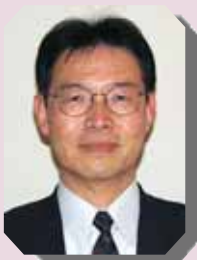
フも増員され、ナースステーションは若い看護師達で活気に満ち溢れる職場環境となりました。私は圧倒され名前と本人と一致するまで時間がかかりました。

私がこのように長い年月勤務出来たのは、良き上司、諸先輩、仲間そして家族に支えられ、助けられ、やっとここまでたどりついたと思っ

ています。たくさんの人々に巡り会えたことに感謝、感謝で一杯です。これからは今までの経験を、今後の人生へと活かしていきたいと思いま

す。最後になりましたが、弘前大学医学部附属病院のご発展と皆さまのご健勝と、更なるご活躍をお祈り申し上げます。

定年退職に 当たって 一月日は百代の 過客、光陰は 矢の如し—



附属病院医事課長
石崎 孝志

小生、この3月で定年退職となります。あっという間の40年余でした。

「月日は百代の過客、光陰は矢の如し」。幾多の反省と感慨を込めて、しみじみとそう実感しています。この間、いろんな意味で大樹「弘前大学」の陰に寄っての日々でしたが、小生も間違いなく団塊世代

として、所謂「会社人間」ならぬ「大学人間？」として生きてきました。弘前大学という心地よい空間に暢気に安住し、どっぷりと浸かって、さも当たり前のような顔をして日数を重ねてきました。

長らく弘前大学に在職して、「おまえは大学に何か貢献したのか？」と自問はすれど、胸を張って答えられることとありません。甚だ心苦しい限りです。大甘の自己評価でも、精々「5段階評価のレベル2～3程度」が妥当なところでしょうか。今頃になって、忸怩たる思いが全身を苛み続けます。何とも面目のないことで……。

これまで多くの方々にご迷惑をお掛けしてきたことか。誠に申し訳ありませんでした。お陰様で何とか無事に、大過なくここまで迎り着けました。これも偏に上司始

め同僚、関係各位のお陰と感謝いたしております。

4月からは、弘前大学という大きな後ろ盾は既になく、その上、無位無冠無所属の如何にも心細い、しかし、文字通りシンプルで身軽な生活が始まります。暫しの休息を経て、余生は、恐らくは安易に推計して10年±5年くらいの時間を、少しでも他人様、世間様のお役に立ちたいものだと思っています。

長い間、大変お世話になりました。有り難うございました。

最後になりましたが、我が弘前大学が地域とともに益々発展されることを、また各位が愈々ご活躍されることを切に願って、退職に当たっての所感とご挨拶といたします。

退職を目前に駄作一句。『キャンパスになごり残して三月尽』

弘大を去るに当たって

学務グループ 係長
小野 和明

この度、退職に際し「弘大を去るに当たって」との課題で文章をとの依頼をいただきました。

さて、何を書けばとさんざん悩んだ果てにたどり着いたのがやはり私のライフワークである釣りのことで

した。仕事と釣りをいかに両立させ本学職員を演じてきたか、演じられたかをこの際素直に書いてみたいと思いました。

昭和50年頃本学には海釣りや川釣り二つの職員親睦サークルがあり、盛んに釣り大会を開催していました。同僚に誘われ、高校時代以来の溪流釣りに参加してみたところ優勝してしまい、このことが深みにはまるきっかけとなってしまいました。

その後、「北の釣り」という青森県内の釣り情報誌に頻りに十和田湖

のルアーフィッシングを紹介していた市内のサークルに入会し、ルアーに触れ、以降ルアーフィッシング、フライフィッシング、鮎の友釣りと目の色を変えフィールドに通い詰めて今日までできました。

さて、本題に入りますが、本学も気楽な公務員時代は既に昔話となり、今や最低のコストと人材でいかに最大の利益を生むかでのぎを削る、まさに企業生き残り戦国時代に突入し、日々の仕事を片づけるだけでなく、たえず厳しい内外の評価のもと業務の改善を求められ、休む



ことはもちろん、立ち止まることさえはばかられ、絶えず前進あるのみ、精神的にゆとりを持ってない職場になってしまいました。このような時こそ仕事と余暇を完全にリセットできる何かを身につけていなければ新たな思考や意欲は生まれてはきません。

私の場合、毎日でも好きなフィールドでルアーを投げたい。これが本心です。たまに好きな釣りをなどという、いわゆる趣味の域からは完全に出ています。

仕事をしながらふと釣りのことを考えています。たえず頭の中は今度の休日の釣りの組み立てのことが思考の半分以上や七割近くを占領しているのです。これは正直困ったことです。このことで、仕事上迷惑をお掛

けたこともあったかも知れませんが、自分にとって最大の楽しみが絶えず頭の中で渦巻いているのです。考え方によっては、こんな楽しい人生はありません。

日々の仕事の中には手間の掛かること、失敗したこと、腹の立つ場面がたくさんありました。しかし、この局面を乗り越えれば楽しい土日の休みがやってくる。この本当に単純な思考回路がこれまでどのような窮地も救ってくれましたし、最大の明日の活力となってくれました。

したがって、仕事上のストレスで悩むとか、あげくは自ら命を落とすなどの事例が度々聞かれますが、仕事に勝る楽しみを持っていれば、このような発想にはならないのではと思うと残念でなりません。

世間に趣味と言われるものはたくさんあります。しかし、明日の活力につながる真の趣味を持つて人はそう多くはありません。一生付き合える楽しみを早く見つけてください。このことが必ず日々の仕事の大きな助けともなるでしょう。

最後に中国の諺を一つ紹介して終わります。お世話になりました。

一日幸せでいたかったら酒を飲みなさい。

三日幸せでいたかったら豚を殺しなさい。

三ヶ月幸せでいたかったら結婚しなさい。

一生幸せでいたかったら釣りを覚えなさい。

何にでも挑戦した学生生活



左側が本人

医学部 医学科
今 智矢

憧れの医学部に入学できた時、「やりたいことはしよう」と心に誓いました。今思うともっともっとできたかもとも思いますが、できるだけ色々なものに首を突っ込み、できるだけ悔いなくやろうと心がけてきたつもりです。

そんな学生生活を振り返ってみますと、私の6年間は一応医学生という肩書きはあるものの医学のことはほとんどわからず、それなりに青春

を謳歌した大学生4年間で医療現場に飛び込み、医師というプロフェッショナルになるために一生懸命努力した医学生2年間に分けられるような気がしています。

大学生4年間では、部活とサークルでたくさんのよき仲間と出会って人間的に成長し、飲み会ではしばしば夜が明けるまで飲み、仲間と集れば爆笑事件の話をし、旅行にはリュックサック一つで海外の秘境に出かけ、他にバイトや趣味と若いからこそ挑戦できたことが色々あったのだと思います。もちろん進級の際には目を真っ赤にして机にしがみついた苦難の試験勉強を乗り越えなければなりませんでしたが。

そんな典型的な(?)大学生から本当の意味での医学生になったのは5年生からだったような気がします。医療現場に飛び込み、患者さんと実際に接するようになって職業として

の医師の修練が始まりました。患者さん・先生方との現場での生き生きした経験は毎日とても刺激的でした。「早く医者になりたい」という思いから、面接・診断技術を高めるために仲間と勉強会を開いたり、人の生死について語り合ったり、遠方まで講演を聴きに行ったりという様に新たな挑戦が始まりました。

そのような経験は今では宝物のような思い出に思えます。もちろん、教員、職員、患者さん、地域の皆さん、仲間、両親の温かい支援があってこそだったと思っています。とても感謝しています。卒業に際して「これからはお世話になったみんなに恩返しができるようにがんばっていこう」と心に誓い、新たな挑戦を始めて行きたいと思っています。



宵宮の行方



医学部 医学科
船橋浩一

雪が残る4月の弘前に夜行バスで到着したのが随分と昔の様でもあり、ついこの間の様でもあります。私が弘前大学に編入学してから早や4年、大学では尊敬すべき先生方や個性的な友人達に出会い、また時には反面教師とすべき医師の言動にも接する事が出来ました。それら全ての出会いが私の貴重な財産となっています。

しかし、何と言ってもこの4年間の最大の収穫は弘前での生活そのものであったと思います。弘前に来る

までずっと大都市圏で生活してきた私にとって、メディアを通じて地方の情報に触れる機会は少なくなく、地方が抱える様々な問題や地域文化の面白さは「知っているはず」の事でした。ところが実際に弘前に住み、地域の生活者の一員となり、地域の人たちや地元メディアから得る濃密な情報に日々触れる事で、それまでの自分の「知っているはず」の浅はかさを痛感する事になります。生活を続ける中で、この地方が抱える経済や医療など様々な問題への関心は大きく高まり、またそれ以上に祭りや食をはじめとした津軽の多様な文化や豊かな自然に魅了されていきます。

例えば弘前の夏の風物詩である宵宮。最盛期ともなると毎晩の様どこかの街角に夜店が並び近所の小中学生が集まってきます。コンビニやショッピングモールのおかげで「毎日が祭り」の様になってしまった今の時代、宵宮の様な地域に密着した

素朴な祭りに接する事が出来るのはとても幸せな事だと思います。

近年、「地方の問題」が何かと話題になっています。一足早く人口減少が始まり、高齢化が急速に進んでいる青森県は今後どの様な道を進んでいくのでしょうか。宵宮やねぶた、津軽塗など津軽が誇る素晴らしい文化は22世紀まで継承される事が出来るのでしょうか。私は一人の生活者としてこの地に暮らし、また研修医として様々な人に出会いながら、もう少しこれらの問題への自分なりの思索を続けていきたいと思えます。



保健学研究科・保健学科

お世話になりました。 ありがとうございました。 ございました。



健康支援科学領域 健康増進科学分野 准教授
阿部 テル子

平成20年3月31日に定年退職する。2~3年前から分っていたことであるが、一向に実感が湧いて来なかった。しかし、不思議なことに、今年の正月が過ぎた頃から急に実感がわいてきた。おかしなことである。

思い返せば、弘前大学には本当にお世話になった。弘前大学に育てて

もらい、皆様の暖かい厚意に見守られながらここまで来れたことを、身にしみて有難いことだと感じ入っているところである。

昭和40年4月、看護助手（これは、当時、看護師免許交付期日が5月であったために、看護師として採用された者は全員無資格者として採用された）として採用されて以来、実に43年の歳月を弘前大学にお世話になったことになる。この間、医学部附属病院看護師、医学部附属看護学校専任教員、教育学部教員、医学部保健学科看護学専攻教員、大学院保健学研究科教員として在職させていただいた。この間の数々の出来事、経験から多くの学びを得ることができたと思っている。教育学部看護学科内におけるさまざまな出来事、大学における看護教育の確立・

日本看護研究学会の設立に向けての熊本・徳島・千葉大学特看の先生方との協議・研究・交流、医学部保健学科の設置と設置後の教育・運営に関する取組み等々。その時々は大変であったが今では懐かしく思い出される。今、私がここにあるのはこれらを通しての学びと多くの学生からいただいたヒント、大学人のあり方を教えていただいた教育学部の皆様、そして何よりも同僚の支えによるものだと思っている。

最後の職場となった保健学研究科は、看護の高等教育機関としては歴史が浅いが、短期間の間に大学院を設置するほどハイスピードで発展している。私が言えば口幅つたいが、わが国の看護系大学の中で他に類のない特色ある大学、レベルの高い大学と評価されるように、皆様には今



後も頑張してほしいと念じている。
弘前大学を去るに当って、改めて卒

業生・学生・教職員の皆様に心から
感謝を申し上げ、ますますの発展を

祈念申し上げます。

退職に あたって



健康支援科学領域 障害保健学分野 講師
宮本 昭子

弘前大学に35年間勤務し、平成20年3月末で定年退職することになりました。お世話になりました皆様方に感謝申し上げます。

想い起こせば、昭和48年、弘前大学医学部附属病院に助産師として勤務し、臨床経験3年後に弘前大学医療技術短期大学部専攻科助産学特別専攻の助手として移籍しました。当時の新道幸恵先生、西野先生のもとで助産師教育に携わって来ました。学生数は20名、助産師教育は1年間で行われていましたが講義・実習は年間とおして行われ、助産ケアのための夜間実習、集中実習、妊

産婦の家庭訪問など、学生のスケジュールは過密な状態でした。しかし、教員と学生との関わりは、かなり密に行われていたのを記憶しています。

助産学生の実習では、指導者の指導のもとに産婦のケアを行い助産学の実践力を習得しています。母子の生命の安全を最大の目標に、産婦の経過を学び、正常・異常の判断力を問われるため常に緊張した状況で実習している姿、また、「命の誕生」の場面で感動している学生の姿……など。当時のことが懐かしく思い出されます。このような実習は主に弘前大学医学部附属病院で行われていましたが、少子化の影響もあり一定期間だけ、数力所の施設に分散しての集中実習を行っていました。

看護教育の改組に伴い、保健師・助産師教育は4年制の中に含まれることになり専攻科の教育は平成15年度で終了となりました。看護大学での助産師教育は選択制で行われ、大学3年次に選抜試験を行い教育することになりました。学生の人

数は10名程度、担当教員は母性看護学、助産学担当教員が行っています。専攻科教育をしていた私たち教員は、初年度から助産学を担当することになりましたが、講義・実習時間は少なく、限られた時間での教育に厳しさを感じながら教育内容を検討してきました。また、実習は1施設に学生1名で集中して行うため、県内・近県の施設、助産師にご指導・ご協力を頂いています。

助産師教育に長い間携わってききましたが、助産師が好きな一人として今日まで、母子チームの一員として仕事のできたことを嬉しく思っています。また、この間に短期大学・看護大学と組織も変わり教育内容も変化しましたが、それらに対応できたのも皆様の支援があったからと感謝いたしております。今後も弘前大学の発展と職員の皆様のご健康を祈念申し上げます。

退職にあた っての雑感



医療生命科学領域 放射線生命科学分野 教授
岩崎 晃

昭和40年3月に弘前大学文理学部理学科（物理学）を卒業後、今日まで、半世紀にわたり弘前大学に大変お世話になりました。卒業後、放射線医学教室に4年、診療放射線技

師学校に約10年、医療技術短期大学部に約20年、医学部保健学科に約10年という経歴です。このように、ほとんどの年月が放射線技師養成の教育・研究にあたっております。教育組織が大きくなるにつれて、それなりに高級になりましたが、小生にとっては住みづらくなったのも事実です。

昭和40年前後、全国の放射線医学教室に理工学部出身者が研究者として多く入った。これは、欧米での医学物理士の放射線診断・治療での活躍を手本にした現象でした。欧米では、その分野での医学物理士のポスト・業務役割が明白になっており

ますが、日本ではそのような体制がとれなかった。そのような状況が今日まで依然続いております。そのような状況下にある臨床現場では、関係する業務資格がなければどうしようもなく、活躍の場がないと断言できます。また、昭和50年代あたりになると、CT画像を取り入れた放射線治療線量計算に威力の発揮するコンピュータが導入され、もはや単なる医学物理士は、放射線治療の分野には不要になった感がしました。このような状況下で、小生が放射線技師養成教育に専任出来たことは幸いなことであつたと思います。

その間、ずっと放射線治療に関す



る線量計算法を曲がりながらも細々と研究してきました。このことが放射線技師養成教育と共に、本日まで持ちこたえた気力の源とっております。でも、挫折感も若かりしころから今日の今日まで数多く起っております。でも最近では高年齢のせい、頻繁には起らず、また起さないように極力努力しております。そんな訳で、自分の身を「崖っぷち」に置いて、自分なりに楽しむ癖がいつの間にか付いてしまいました。結局は、自分の身を組織の中央に入れて

の活動は、苦手になりました。

このように臨床分野に異物的な人間として入ったため、生まれつきの性格もあると思いますが、人間性がガッツに育ちました。でも、若いころには酒を飲む機会が数多くあって、その分、人間性も豊かになりました。また、短大初期時代には、6専攻間で、専門分野が広く異なる人たちとの交流も、今日までの人生感の成長に貴重な役割を果たしたことも事実です。

肯定的な思い出は、勿論このほか

にも数多くあります。それをも含めて、これからの人生哲学感の磨きに大いに生かそうと考えております。これからは、ほとんど予定の入らない生活になりますので、後半の人生は相当長く感ずると思います。何が起ってもびくともしないで、残りの人生を楽しんでいきたいと思えます。最後になりましたが、これまで皆様から頂き、小生の貴重な人生哲学につながった「思い出」に対して、皆様に感謝の意を表したいと思えます。

明日は明日の風が吹く



事務長
樺澤 美代子

そうか3月にいよいよ定年か。目の前の仕事を片付けることに追われていては、何の準備もできないけど、「明日は明日の風が吹く」。振り返ってみるといつの頃からか、これが私を支える言葉、口癖となっていました。今日を精一杯やった後という厳しい前提がありますが。

今、日本は変革の時代にあり、本学も避けては通れない流れの中にあります。私が比較的最近関わったこ

とで言えば、学生就職支援センターが設置（平成16年4月）されたこと、医学部保健学科に大学院保健学研究科博士後期課程が設置（平成19年4月）され、併せて大学院部局化されたことがあげられます。

センター設置に至るまでには、なぜ大学生の就職のために手取り、足取り支援しなければならないのか、独り立ちする機会を奪うことになるのではといった声もありましたが、これも時代の要請だったのでしょう。また、就職支援を通じて、本学学生と身近に接することができ、誰がなんと言っても学生あつての大学だと強く感じることができました。事務職員には全員、学生担当部署を経験させるべきだと思っています。

大学院保健学研究科博士後期課程の設置は、修士課程（現前期課程）が設置された当初から計画されていたことでしたが、大学院部局化は想

定外の出来事でした。先生方は、医学部保健学科所属から大学院保健学研究科所属に異動することになり、これまで以上に研究実績を求められることになりました。そのための予算増はありませんが。これも時代の要請、それとも将来への布石となるか。

こうして本学の変革に追い立てられているうちに、「明日は明日の風が吹く」となっていたわけですが、切羽詰まらなないと動かない性格の私を事務職員として、厳しくも暖かく見守ってくださった上司や同僚、先生方に恵まれ充実した日々を送ることができました。今は大変な時期ですが、本学のこの努力は必ず報われる日が来ると確信しています。

最後となりましたが、これまで御指導、御支援くださいました皆様へ心から感謝申し上げます。

忘れられない言葉

学務グループ 係長
國包 勝榮

機会があって弘前大学に就職してから幾つかの学部の事務に携わり、この春定年を迎えることになりました。勤めた頃はパソコンはもちろ

ん、コミュニケーション、プライバシー等の言葉が職場で話されることもない時代でしたが、係の中での人間関係に濃密さがあつたような気がします。大事なことはメモし、必要があれば係内での話し合いを通じ問題への対応等について、共通認識を持たつたような気がします。勤務時間中、机から離れられないほど仕事が

多くなかつた時代、同じ大学に勤める方から仕事がないことは、その人を否定することにならないかというようなことを言われたことが、その後、仕事や社会と向き合う時に心ずることとなりました。社会は大きく変わりましたが、自分の生き方・価値観を持っている人は、強い人だと思えるこの頃です。



夢を応援してくれ た両親に感謝



保健学科 看護学専攻
阿保 早苗

私は「助産師になる！」という夢を胸に、編入しました。弘前大学に編入してからの2年間は、自分の夢への道をぎゅっと濃縮させた日々という印象です。

小学生の頃から助産師になるという夢を持ち始め、浪人、編入と回り道をしながらここまでできました。しかし、高校に進学するときなど、何度か気持ちが弱くなってしまっ

ともあります。その度に両親は相談に乗ってくれました。その中でも一番思い出に残っていることは、看護学校を卒業後どうするか決めるときのことです。これ以上親に経済的な負担をかけたくなかったので、就職してお金を貯めてから進学しようと思い、両親に「就職する」と伝えました。進学を勧める母とは大喧嘩しましたが、両親から最後に返ってきた返事は「お金のことは心配しなくていい。助産師になりたいんでしょ？せっかくここまで来たんだから。一緒ががんばろう。」という言葉でした。本当は進学したいという気持ちに両親は気づいていたのだと思います。この言葉を聞いて、助産師になる夢はもはや自分だけのものではなくなっていることに気づきました。

編入してからは、思春期の中高生

と自分の性について一緒に考えるピア活動や、助産師と保健師の実習、よさこいサークルなどいろんなことに挑戦して充実した大学生活を送ることができました。また、ばかな話をして笑える友達や、一生懸命がんばることの刺激をくれる友達に会えたことは、何よりもありがたいことだと思います。分娩介助実習では、生命の誕生のすばらしさを感じると共に、母と子の二つの命を支えるという助産師の仕事の厳しさとお産の怖さも知りました。元気に生まれて初めて正常分娩と言えるのであり、命の誕生は、奇跡だと思います。春からはたくさんの奇跡に立ち会う助産師として、責任と自覚を持ってがんばりたいと思います。そして、助産師になる夢を応援してくれた両親にありがとうと伝えたいです。

感謝



保健学科 検査技術科学専攻
伊藤 さやか

これからの生活への大きな期待と少しの不安を抱いて入学した4月を思い出します。

私は、3年次編入学でしたが、入学当初はわからないことだらけで、入学したその日から、同じく編入学した仲間で先生方の研究室や学務に履修科目についてなどいろいろ質問に行きました。この研究室・学務巡りはしばらく続きましたが、それがみんなと話す良いきっかけにもなり

ました。また、教室に入ることさえ緊張していた時期を思い出します。ドアを開けるとそこには初めて会う3年生のみんなが座っていました。打ち解けられるか心配もありましたが、席を迷ったりしていたとき声をかけてくれたり、学校生活のことを聞くと気さくに答えてくれて親切でとてもありがたかったです。1年目はとにかく動くことで自分の足場作りで必死でしたが、みんなのおかげで乗り越えられた1年でした。

そして4年生になり、印象深かったのが臨床生理学実習の手伝いや卒業研究です。臨床生理学実習では、自分で理解していると思っていたことでも、実際説明するとなるとうまく伝えられず、後輩に申し訳ないなと思うこともありました。これから就職して患者さんに説明する機会があったとき、分かりやすく話せるよう努力したいと思いました。卒業研

究は予想していた結果が出ない日が続いたり、実験プロトコルやデータの検定法などでかなり悩んだ時期もありましたが、研究室の先生や仲間と相談することで解決できました。

短大の時は、与えられた目の前にある課題をこなすのに精一杯で、どちらかと言うと受け身姿勢だったと思います。しかし大学では受け身ではいけない、待っているのではなく自分から能動的に行動し、広い視野で物事を考え選択して行くということ、そして協力することの大切さを学ぶことができました。就職しても大学で学んだことを生かし日々邁進して行きたいと思います。多くの方々のおかげでこの貴重な2年間を過ごすことができました。自分を支えてくれたすべての方々に感謝します。





共に笑い、 共に学ぶ



物理科学科 教授
岡崎 禎子

昭和40年4月、発足したばかりの理学部物理科学科の助手として採用されて以来、43年が過ぎようとしています。定年を迎え、「よく、ここまで続いたなー」と言うのが、私の実感です。

就職して間もなく、学生による本部封鎖に見舞われました。昨日まで一緒に実験をしていた学生が、今日は、建物を封鎖する。大学管理法案をめくり、教官も学生もゆれた時代でした。学生の処分をめくり、教授

会は延々と続きました。このような状況下で教職員組合が結成され、圧倒的に教員の数が多いため、教官組合と皮肉られました。しかし、バラバラであった教官が、お互いに腹を割って話し合える。組合の果たした役割は実に大きかったと考えます。

助手の時代が長かった私の主な仕事は、学生実験を面倒みることです。もう1つは、ゼミで学生と雑誌を読むことです。たびたび、野外ゼミが企画され、よく遊び、よく学び、ゆったりと豊かに時がながれた時代でした。

平成9年、理学部は理工学部への改組が余儀なくされました。生物科学科は農学部へ移管され、知能機械システム工学科が設置され、新しい教員を加えて教授会も一変しました。私の研究も理学系の「磁性」から工学系の「磁気ひずみ」へと変化します。金属の磁気ひずみは、理学部時代から研究されてきたテーマの1つ

ですが、この機能が、素材そのものにセンサ機能とアクチュエータ（行動をおこす）機能を含む、新しい概念を持つことを教えてくれたのは、知能機械の古屋泰文教授でした。特に、非接触な磁場で、微細にものを動かす機能は、ロボット等マイクロマシンで不可欠な要素となります。ここからは、駆け足の時代です。特許がかかりますので、休んでられない。学生達の頑張りは目を見張るようなものでした。このころから「機械は学生が動かし、岡崎は口だけ動かす」ことになりました。

今、過ぎ去った43年を振り返り、懐かしい先生方、卒業生達の顔が浮かんできます。故人になられた方、音信不通な人、それぞれ、時の流れに沿って、相見え、別れ、お互いに影響を受けながら、この学部を支えてきたことを感じます。その一員になれたことを、誇りに思います。

止観修行



物質創成化学科 教授
田尻 明男

弘前大学に赴任後の平成元年、思う処あって比叡山行院に入学したことがありました。これは宗教法人の天台宗が毎年春、夏、秋の3回2ヶ月を1期として、主に寺院の子弟を教育するシステムです。しかし、行院生の中には様々な動機や事情から入門する人もおられます。過去を断ち切る必要から登山する者、哲学としての仏教に以後の人生の意義を見つけようとする者、制御不可能な言動を正すために放り込まれた者など、有職無職、年齢性別を問わず

全国各地から人々は集まります。

ここでの教育をざっくりと言ってしまうと、民主的な教育指導とは全く無縁なところで、行院生はただひたすら天台の教義について教えを乞い、作法を実践するというものです。教育の効果を上げるために文明の機器を利用するとか、懇切丁寧な課外授業をするとか、指導する側と指導を受ける側が親しく交流するとかの欧米風の近代的教育手法は皆無です。指導の方針や方法についての異議や注文などは勿論出来ません。従って、これは教育を受けるというようなことではなく、教義という不動のものが在り、それに食らいつくために自ら意図して登山し、うまくそれに取り付く（生きる）か、それとも敢えなく破れる（死ぬ）かの、自らに課した過酷な修行の場なのです。肉体的にも精神的にも忍耐が必要なこの修行においては、半ばで山を下りる人も出て来ます。自らの都合で行をやめた人は二度と登山する

ことは出来ません。実際行が進むと肉体的にも消耗して足腰が万全でなくなったりします。階段で転倒して大けがをしても、病院に連れて行ってくれと自らが言葉に出せば、それで僧としての一生は終わりです。また、過酷なトレーニングや団体行動であればあるほど食事の時間というもの最大の喜びの一つですが、この修行の期間中はこれを食事とは呼ばずに「非食（ひじき）」といって、余計なこと、出来れば無しで済ませたいもの、としています。というよりも、非食それ自体を行と見なすのです。食事の雰囲気は他から見れば、従って、異様な雰囲気です。食事の部屋は物音一つしません。膳から茶碗を取る、置く等の所作の時、さらには食べ物を口中で噛んだりする際、決して音を立ててはいけません。隣との会話などは論外です。指導者が同席しますが、その者が箸を置いたらそこで食事は終わります。従って、早く済ませなければ

なりません。食事が非食たる所以です。

この他にも回峰行や3000回の五体投地礼等、様々な難行苦行が修行僧に降りかかりますが、それだけに満行の時の達成感は格別です。そして、達成感と共に私の場合は天台の僧としての自覚が生まれました。それは下山の朝、修行の道場のある横

川から根本中道までの杉木立ちを歩いている時、木漏れ日と共に突然に襲いかかったように感じました。丸刈りになってなおさら目立つようになった後頭部をどうかして隠せないものか、と感ったことが何と愚かしい考えであったか、僧形でこれからを通すことに何の不都合があるか、そしてこれから先を自分は天台

の僧として生きてみよう、と覚悟したのです。

冬の時代の 大学を去る に当たって



地球環境学科 教授
南条 宏肇

わたしはこの3月で定年を迎えることになりました。年月の経つのは速いもので、弘前大学理学部に赴任したのが昭和51年の33才のときでしたので、もう32年にもなりました。今思えば長かったようでもあり、またあつという間でもあったようにも感じ、不思議な感覚です。その間いろいろなことがありましたし、またいろんな方にも迷惑をかけたことと思っておりますが、なにはともあれ大過なく仕事を全う出来たのは、皆様の支えがあったおかげ

と、心から感謝いたしております。

私が理学部物理学科に赴任したときは、高度経済成長時代であり、赴任後大学院修士課程が整備され、学科も地球科学科、情報科学科が新しく設置され、発展の一途をたどってきました。高度経済成長に陰りの見え始めた平成9年には、新たに工学系を加えて理工学部になり、平成14年には懸案の博士後期課程を加え、学部として一応の完成されたものになりましたことは、その長い道のりを歩いてきた私にとっては大きな喜びであります。

しかしここにきて大学を取り巻く状況は非常に厳しくなってきました。国の財政事情が厳しさを増すとともに、少子化のあおりを受け、さらに理工系では理科離れの影響をまともに受けるという、いわゆるトリレンマに陥っています。

さらに問題なのは、教育が経済原理に合わせて振り回されていることだと思えます。教育は100年の計

といわれますが、どうも現在の経済界、政治家は教育を目先の経済回復の道具としか考えていない。すでにサブプライム破綻、イスラム圏とアメリカとの深刻な対立、地球温暖化など市場原理主義の破綻が顕在化しているにも関わらず、いまだ教育を経済に合わせる道歩んでいるということは悲しいことでもあります。しかし私たちはこの厳しい状況の中で未来のために教育を守っていかねばならない責任があります。

今は時代の大きな変わり目です。いつまでもこの教育にとっての冬の時代が長く続くということはないと思っています。「冬来たりなば、春遠からじ」、そのときまで教育と研究という基本の原点に立って、また地方大学としての地域への貢献という視点を忘れず、やがて来るであろう春に向けて頑張ってください。退職後も陰ながらお祈りいたしております。

これまでと これから



電子情報工学科 教授
真下 正夫

電機メーカーT社を役職定年を前にして退職後、弘前大学で10年半お世話になりました。「これまでとこれから」は昨年7月弘前大学出版会設立3周年記念講演会での大学出版部協会理事長山口雅巳氏の演題ですが、現在の心境にぴったりです。ので拝借しました。企業や大学という組織による保護と束縛のもとから定年を境に解放されることは楽しみである一方、これまでになく大きな変

化であり、次のスタートに当たってどうするか、当面の課題です。「これから」は「これまで」があって始まると思われ。静かに振り返ることが「これから」を導き出すのに大切かと思っています。

振り返れば、やはり最近では弘前大学出版会の立ち上げに携わり、順調に発展していることは一番の喜びです。出版会は先生方の研究業績を



広く公開する役割を担い、幸いにも当出版会の活動は学外からも高く評価され、大学に少しは貢献できたかと思っています。研究面では弘前大学着任直後の平成10年度から科研費申請が4回連続採択されたことは自ら驚くとともに幸運でした。また、着任と同時にアネルバ(株)(当時)の友人からスパッタリング装置の寄贈の申し込みや東北大学金属材料研究所の友人からの共同研究へのお誘いは感謝せずにはいられません。地域企業三社とは縁あって技術

協力や共同研究により親密に交流ができ、研究に刺激と張り合いを与えていただき感謝しています。研究には社会のニーズが一番の栄養ではないかと考えています。

出版会から「旧制弘前高等学校史」を発刊した折、その書の中で現在は希薄になった恩師と学生との間の信頼と心の交流に触れ、教育の原点を見る思いで感激しました。人と人との直接的な触れ合いがなければ教育は成り立たないことを自らの経験からも痛感しています。

遡って、T社での一番の思い出は昭和56年世界で最初に実用化された書き込み可能な(追記型)光ディスクを発明できたことです。この経験によって研究に対する自信が得られ、何事によらず自身の考えが余りぶれることはなくなりました。

「これまで」でいくつか達成感が得られた場合に共通な点は能力ではなく、その時々で「本気」であったことのように思います。このことは「これから」の指針とするに足るものと思っています。

本物の分かる人間に!!



知能機械工学科 教授
宮田 寛

弘前大学に赴任して9年になった。最近は弘前市やその周辺から岩木山(津軽富士)が見えると、ふるさとへ戻ったような懐かしさとともに、何となく穏やかな気持ちになる自分に驚いています。秋には、白い帽子を冠ったり脱いだりして、その美しい姿と共に厳しい冬の到来のシグナルを発するなど、様々な姿を見せる孤峰・岩木山ともそろそろお別れすることになると思うと、感慨無量なものがあります。

さて、津軽に来て感動を覚えたこ

とを2つ程紹介します。まず、1999年5月に白神山地の麓の村をドライブしていたとき、これまで経験したことのない、ゆったりとした時間の流れを実感し感動したことです。相対性理論?でも解き明かすことはできないと思われる不思議な世界でした。また、2001年の2月には幸運にも、白神山地の麓で岩肌から絹糸のように流れ出る水が凍結してできた、直径1mを超える高さ33mの壮大な乳穂ケ滝(におがたき)の氷柱に出会えたことです。

しかし、その後西目屋村を訪れても、以前のような感動は味わえていません。また、形や太さで農作物の豊凶を占うその氷柱はその後、毎年氷結が進まず会うことができないでいます。人間は豊かな生活や華やかなものに慣れてしまうと、それが当たり前となって関心や感謝の気持ちが薄れ勝ちですが、これらの感動は特に忘れられないものです。

最近、食品の偽装問題が大きな話

題を呼んでいます。単に老舗であるから、高価だからとか、あるいは滅多に手に入らないということのみで、本来の価値とは異なることで物事の価値を推し量ることに問題があります。日頃から何事にも批判的に取り組み、食品に限らず、政治・経済、技術、友達、さらには文化に対してまでも、本物を見分ける眼力を身に付けるようにする必要があります。それが大学で学ぶことの最も大切なことで、人間として生きて行く上で極めて重要なことであると思います。もちろん批判するだけでなく、自分自身も一個人として一社会人として、本物になるためにベストを尽くすことが大切であることは言うまでもありません。弘前大学を包むこのゆったりとした時間の中で、それぞれの個性をしっかりと醸成して、本物の分かる人間に成長されることを祈っております。

節目の年

事務長
京野義雄

先日、「学園だより」への寄稿依頼がありました。早いもので五回目の子年を迎えました。自分ではいつまでも若いと思っておりましたが、歳月だけは正確に過ぎ去り、六十歳の声を聞くことになりました。

顧みれば昭和四十一年四月に弘前

大学経理部に就職し、公務員生活をスタートして以来、四十二年間、ほとんど会計関係の仕事に従事させていただきました。

この間、特に印象に残っていることは、第一に我々同世代なら誰でも経験した「学園紛争」であります。

当時、私は経理部経理課で給与を担当していて、学生達による事務局庁舎封鎖に遇い、学外の場所で給与支給が出来るように対応をしたことが思い出されます。

第二に百年に一度あるかないかの大改革である国立大学が法人化に移行されたことです。まさか、このようなことになるとは思っていませんでしたので、移行のための会計基準等の勉強や新しい規則の制定等の法人化準備に携わったことが、まだ記憶に新しい出来事として今でも

鮮明に覚えております。

第三に大蔵省の会計事務研修を受けたことです。約三ヶ月間東京の市ヶ谷の研修所で研修を受けましたが、講義の内容が会計関係全般でしたので講義について行くのが大変でした。さらに、宿舎が一室に四人収容されてタコ部屋のような状態でしたので、プライバシーが関係ないような生活で長く厳しいものでしたが、自分の担当する職務の糧となるもので、貴重な経験をさせてもらいました。

これまで四十二年間仕事を続けてこられたのは、それぞれの部署で良き上司、先輩、同僚、後輩の皆さんに出会えたお陰だと心より感謝する次第であります。定年を迎え、気持ちを新たに、第二の人生を夢や生きがいを求めながらゆっくりと歩んで行きたいと思っております。

最後になりましたが、弘前大学が総合大学として益々発展することを祈念いたします。

お世話になりました

研究協力係 主任
今 千枝子

振り返ってみればあつという間の38年でした。

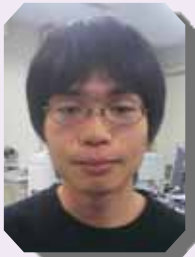
多くの方に助けられ、支えられながら今日の日を迎えることができ本当に感謝です。

様々な出来事があったとしても今思い返してみれば、すべて懐かしく良い思い出になりました。これから

は、ゆったりとした時間を味わいたいと思います。

長い間本当にお世話になりました。

弘前大学での思い出



理工学研究科 安全システム工学専攻
亀田 幸季

私が弘前大学に入学したのは1999年4月、知能機械システム工学科がまだできたばかりのころです。期待と不安の中で、大学生活をスタートしました。

大学では、多くの専門科目から自由に選択し受講できることがとても新鮮に感じられ、様々な専門知識を

深めていきました。研究室に配属されてからは「ヒューマノイドロボットの歩行動作」に関する研究に明け暮れ、毎日が充実していました。

夜遅くまでプログラムを書き、初めて歩行実験が成功したあの日。図書館に籠って、関連図書や文献を調べまくったあの日。緊張と不安でいっぱいの中、国際会議で発表したあの日。思い起こせば、いろんな事がありました。数えるとキリがありませんが、どれも僕にとっては大事な思い出です。

このような充実した日々を過ごせたのは、同研究室の仲間達がいたからです。パソコンの前で頭を抱えていた時や落ち込んでいる時、多くの助言・叱咤激励をいただきました。その暖かい一言一言に、どれだけ勇

気付けられたことか……。現在の私があるのは、多くの仲間達のおかげです。

これらの経験は私にとって誇りであり、かけがえのない貴重な財産となりました。このような経験を得ることができたのも、弘前大学での生活や出会った人たちのおかげであり、感謝の思いでいっぱいです。

春から、新しいスタートラインに立ちます。弘前大学で得た経験を心の支えにし、それを活かしながら進んでいこうと思います。



成長



理工学研究科 電子情報システム工学専攻
渡邊 裕介

卒業を迎えると6年間弘前大学に所属していたことになります。しかし、この年月は決して長い訳ではなく、むしろ自身の感覚では非常に短かった。それだけ私生活・学業において充実した日々を過ごすことができました。満足した生活を送ることができたのも信頼できる友人がいたことが一番の理由です。共に遊び楽

しんだし、また、辛い時にはお互いに励まし合いながらお互いに成長することができました。この6年間で出会った全ての人たちがいたからこそこの大学生活だったと思います。

また、大学4年次及び大学院の2年間の研究において、自分自身が成長していくのが実感することができました。それまでは教えられたことを単純にこなせば良かっただけで、その最たる例が受験勉強です。そのため、意識は低く気持ちも楽だった。しかし、研究では教科書は無く、自分で試行錯誤を繰り返して行くしかありません。自分に足りないこと・必要なことは何か。自分自身を見つめ直し、無い知識や技術は論文や参考書等を活用して身に付けていかなければなりません。当初、この意識改革は辛かった。なぜな

ら、全ての責任は自分にあり、人やものに責任転嫁することは逃げ出すことと同義だからです。この変化の中でも、指導教官から助言を頂いたり友人と議論をしたりと出会った人達の存在は大きく、精神的に成長することができました。振り返ると、数年前の自分と比べて自主性が高くなったと実感することができます。

集団から外れ孤独に生きるのではなく、繋がりの中で自分のスタイルを見つけて能力なり個性を発揮していくことが自立だと思います。社会に出ても人との繋がり大切さを忘れずに切磋琢磨していきたいです。最後になりましたが大学生活で出会った全ての方々へ感謝したいと思います。

農学生命科学部・農学生命科学研究科

思い出すまま

附属生物共生教育研究センター
循環型農業生産部門 准教授
村山 成治

学部から45kmほど北の旧金木町に在る農学生命科学部（以下は学部）の金木農場（以下は農場）に約43年間勤務して退職することになりました。自家用車通勤が冷遇されて通勤手当が微少でした時代は、6時半に家を出て列車に揺られること2時間、8時半の『朝礼』に間に合わせ、帰宅は列車の都合で21時過ぎという日課が続きました。この朝礼は体操を行った後、その日の打ち合わせを行うもので、27年間もつづけました。大学で朝礼などという時代遅れも甚だしいと思う方が多いでしょうが、迅速な情報伝達が

でき、職種を超えて互いの仕事を掌握し合え、コミュニケーションがはかられ、簡単な体操が事故防止につながるなど多くのメリットがあったと思います。車通勤になりますと、学部間がわずか2時間10分で往復できるようになり、肉体的疲労が少なくなりましたが、学部での業務が増加して、フィールド業務が少ない後期になると、講義や卒・修論指導、そして会議と学部通いが連日ということも珍しくありません。また昼前後に会議が設定されると、農場間を日に2往復ということもあり、運転業務が本務ではないかと錯覚する有様でした。今後は学部業務を行う曜日を固定するなどの工夫をしなければ、肉体的疲労と経済的負担が多くなるばかりでなく、研究成果も上がらないということを新任の先生に申し残したいと思います。

着任当時17名だった農場職員がわずか7名になって『弘大の孤島』観が強まっていた農場に、最近学

部の協力教員制度ができて学生が日常的に卒論・修論の実験にやってくるようになりました。この制度は始まったばかりなので、卒業生がわずか9人ですけれども、農場はすいぶん賑やかになりました。職員は学生に非常に好意的ですし、活気を取り戻した感があります。私自身も、学生にはこれまでと違った関心を持てるようになりましたし、研究遂行の上でも張り合いがありました。今後は教員が2人に増員されますので、協力教員制度自体や学生の往来手段に疑問が残りますものの、学生の利用率は相当高まると予想されます。また研究面でも学部との連携が強まって、これまでの2倍以上の成果が期待されます。学部の附属とは名ばかりのような農場の存続に必死だった私にとって、この上ない喜びです。

6年間を振り返って思うこと



農学生命科学研究科 生物機能科学専攻
大久保 喜光

「よく遊びよく学ぶ」これが大学での目標でした。学部3年までは明らかに「よく遊び」に偏重した生活でしたが、その後の3年間は比較的「よく学ぶ」を実践できたかなと思っています。学生の本分は学業であるということ思い出した学部4年の春からは、それこそ学生らしい日々を過ごしてきました。研究を通して、自らの手で新たな発見をする

喜びや、知識を深めていく楽しさを得ることができました。一方で、何の結果も出せなく落ち込んだときや、研究に対する情熱を失いかけたときもありました。しかし、大学院で勉強したい、この研究をしたいと決めた自分の意志、選択を後悔するようなことはしたくありませんでした。そういう思いがあったからこそ、今まで頑張ってきたのだと思います。

今春から種苗会社に勤めることになりましたが、そもそも入学した時から私は植物より動物に関して勉強したいという思いがありました。ところが、思いがけず“ダイズ”の研究室に配属になり、非常に興味を持ったことで大学院に進学し、就職は植物を扱う会社という、最初に思い描いていた青写真とは反対の道を進んできました。つまり、大学には

探せばたくさんの道があり、どのようにも進んで行くことができるのです。初志貫徹で行くのもいいですが、今まで興味のなかったことにも目を向ければ、新しい発見が必ずあると思います。多くの可能性を秘めているのが大学という場所です。これからの道を迷っている人は、目をきよろきよろさせて、自分のアンテナを大きく広げて、新しい可能性を探し出して下さい。

最後に、共に学んできた同期や先輩、後輩、そしてムチで叩かなければ動かない私をあきらめずに最後まで御指導して頂いた先生方に厚く感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました！

大学4年間を振り返って



農学生命科学部 応用生命工学科
山下 麻美子

入学したのがつい最近だったと思うくらい、私の4年間の大学生活はあっという間でした。何かなんだかわからないまま、それでも全ての事が楽しく新鮮で、流されるように最初の1年が過ぎました。この1年で多くの人に出会い、後にこの出会いが私の大学生活を支えてくれました。2年生になると専門科目も増えましたが、夜には遊び歩く暇もあり、そこそこ充実した日々を送って

いました。高校生の時に思い描いた大学生活に少し近づいた感じでした。この年に20歳になり、「どんな大人になりたいか？」とぼんやり考え、自分探しをした年でもありました。

3年生になり今まで以上に忙しく、レポート提出に追われる日々になりました。それでも友達に会うのが楽しみで、休まず学校に通いました。研究室の仮配属が決まり、がむしゃらに実験に明け暮れていました。そんな中で「これから先、自分はどうしたいのか？」という問いに真剣に考えました。すぐに答えは出ませんでした。4年生になり研究を続けて行くうちに、全く思い通りの結果が出ずに奮闘する時期がありました。得られた結果からたくさん考えて新しい事を発見した時、何物にも替え難い喜びと達成感をえました。この時、この「喜び」が私を成

長させると感じ、さらに成長しつづけたいたいと思い大学院進学を決めました。進路が決まってからは卒論に向けてラストスパートがかかり、悩む暇も無く本当にあっという間でした。

この4年間で多くの人に出会い、支えられ、色々な事に悩み、考えました。楽しいことも辛いこともたくさん経験しましたが、その全てが私を大きく成長させてくれました。友達がいなかったら乗り切れなかった時期もありました。そして一人暮らしをして初めて家族の大切さを感じました。こんな私を支え続けてくれた友達、私を支え、投資してくれた家族に心から感謝します。そしてこう思える私に成長させてくれた場所である弘前大学にも感謝します。



定年退職を迎えて

学務部 留学生課長
坪 憲二

振り返れば早いもので、昭和41年4月弘前大学に奉職してから、まる42年の年月が経ち、この3月31日をもって定年退職となります。勤めた当時は42年後の定年までは気の遠くなるような、遙か宇宙のかなたという感じでした。

最初の勤務場所は、附属病院の事務部でした。当時の事務職員には、若い人が多く活気があり、諸先輩には仕事も教えられました。飲みにも連れていってもらいました。当時の先輩諸氏にはよく面倒を見てもらいましたので、頭が下がります。今になって思えば非常によくコミュニケーションがとれていたと思っています。学生諸君も仲間同士、先輩後輩の間で是非積極的にコミュニケーションを図ってほしいと思います。

附属病院勤務ということで、学生さんとは直接接することはありま

せんでした。弘前大学への就職が決まったときは、大学に勤務ということで当然学生さん相手の業務を想定していましたが、弘前大学には附属病院があるので、なるほど病院勤務もあるのかと改めて思ったものでした。

学生さんと直接接できる仕事をしたのは、昭和51年4月からでした。10年間附属病院で勤務した後、学生部（現在の学務部）学生課に異動となりました。そこでは、主に課外活動を担当しました。苦労もありましたがよい思い出もたくさんあります。特に昭和53年に本学の当番で行われたインカレ（東北地区大学総合体育大会）では、いろいろ苦労もありましたが、当時の体育系サークルの代表者、関係者の皆さんに多くのご協力をいただき、無事終了できたことを感謝しています。よい思い出の一つです。

在職最後の2年間は、現在の学務部留学生課ですが、世界各国からの留学生に出会い、過去40年間の勤務とはひと味違った新鮮な気持ちで仕事をさせていただきました。母国を離れて知らない国で勉学に励んでいる留学生を見ると感心させられま

す。日本で学んだことを母国のために活かし、また日本との友好関係に少しでもご尽力いただければ幸いです。また、平成19年5月には思いがけなく協定締結校のヒッペリオン大学があるルーマニアへ出張する機会を与えていただきました。遠藤学長が同大学の創立17周年記念式典に招かれたもので、倉又国際交流センター長、木村学長秘書とともに随行しました。外国の異文化にも接し、在職42年間の中で大変素晴らしい経験をさせてもらい感謝しております。ヒッペリオン大学のスパヌレスク学長先生はじめ関係者の皆様の暖かい歓迎ぶりは生涯忘れられない思い出となりました。

留学生の皆さん、これからもう一生懸命日本文化などを学び、また日本での生活を大いに楽しんでください。

最後に、弘前大学の学生諸君には、これから日本国内はもちろん世界に羽ばたいて行ってほしいと思います。また、それができると信じております。42年間大変お世話になりました。

昭和44年の21日間

学務部 学生課課長補佐
笹 森 利 通

昭和41年に採用された私は、3年後、貴重な体験をすることとなった。

「全共闘」「占拠」「封鎖」「職場を返せ」「最後通告」「機動隊導入」など、これらは昭和44年に起こったある出来事の象徴的な文言である。

言うまでもなく大学紛争での全共闘による本部封鎖のことであるが、本部庁舎に勤務していた私は、9月6日の占拠・封鎖から9月27日の機

動隊導入による封鎖解除までの21日間、この出来事と直面したのである。

以前から、全共闘学生は「6項目要求」等を掲げ、集会、デモ、アジを繰り返し、緊張感は高まっていた。

毎日のように繰り返される評議会や教授会、デモや集会での衝突・小競り合い、団体交渉での怒号、乱闘等こんにちの静かな状況からは想像できない日々であった。

9月6日は土曜日だったが、当時の土曜日は半ドンで12時30分までの勤務であった。

午後2時30分頃、それまで庁舎の外でデモっていた学生十数人が突然、本部庁舎に乱入、1階経理部で残業していた筆者は「占拠した退庁

しろ」と声高に言われるまま、何も持ち出すことができず庁舎をでた。

封鎖後、職場を失った職員による「職場を返せ」デモや教官等による説得、対策協議、機動隊導入を模索する会議のほか庁舎の逆封鎖、光熱水の停止など強硬な手段も用いられたが効果は薄かった。

本部職員は放浪生活を余儀なくされ、私自身は、畳の上での書類作りも体験した。

このような状況は、9月27日（土）の機動隊導入まで延々と続いた。

異常ともいえる体験をした筆者は、このことを一生忘れることはないと同時に、このような出来事があったこんにちの弘前大学があることを胸に刻みたい。



Ⅲ 海外留学報告

近くて遠い国

人文学部 情報マネジメント課程 4年
工藤周子

2007年2月から11月までの9ヶ月間、韓国の大邱にある慶北大学校に留学しました。大邱は釜山より少し北側に位置する、絹とりんごが有名な盆地です。主に夏と冬しかなく、少し暖かくなると感じたらすぐ夏になるという面白い気候も特徴です。

私が大邱に留学を決めた理由は、日本人がほとんどいないこと、物価が安いこと、そして交通が便利なこと。日本人がいないということは、韓国語を話すことができる人にとってはいいでしょうが、私は韓国に行った当初ほとんど話すことができなかったので辛い日々が続きました。しかし韓国語に慣れてくると本当にいい環境で、少数であるため日本人同士もすぐ仲良くなり、日本人の

会を結成して焼肉を食べに行ったりもしました。また、弘前大学へ留学したことがある韓国人もたくさんいたので、弘前のことを語りながらご飯を食べたりなど楽しい時を過ごしました。方言を学ぶことができたことも良い経験でした。

授業は語学堂で韓国語を学びました。文法を学ぶだけでなく、発表や、整形手術についての討論、難民問題、死刑制度、地球温暖化など社会問題についての話し合い、作文などもありました。日本にいた頃、このような問題に時間をかけて話し合い考えたことがあまりなかったので、大変良い機会でした。

先生は女の先生がほとんどで男の先生は一人しかいませんでした。

た。たくさんの先生とお会いしましたが、先生によってクラスの雰囲気も変わり、韓国人に日本語を教えていた私にとって、授業だけでなく別の面でも学ぶものがたくさんありました。日本語を教える先生にもお会いし、海外に行ったことで日本語の新たな面も発見できました。

受験に熱心な国として知られる韓国だけに、勉強の環境は大変整っていました。図書館は2つあり、1つは本の貸し借りができる場所、もう1つは勉強専用の場所です。貸し借りができる図書館の閉館時間は弘前大学と同じくらいですが、勉強専用の方は早朝から夜中まで、試験期間になると24時間開いています。とても広いのですが席を探すのが大変なくら



語学堂4級の集合写真。私を除いて全員中国人です。



西門市場。これは靴の店ですが、市場は広く何でもあります。

い、韓国人は勉強熱心です。寮の中にも勉強部屋があるので、夏の暑い日などはそこで勉強する日もありました。

韓国に修学受験というものがあるのですが、試験の妨げにならないよう、試験の時間帯は飛行機が飛ばず、車がクラクションを鳴らそうものなら警察が来るそうです。これは世界的に見ても韓国だけで、受験に対する強い意識がうかがえます。

もともと辛い食べ物は好きだったのですが、日本とはまた違った辛さに驚き、苦しんだこともありました。しかし食べる内に夢中になり、韓国人よりも辛いものを食べ、驚かれたこともありました。学校の食堂で辛い大学芋と辛いミートソーススパゲッティを食べたときは、韓国には辛い食べ物が本当に多いのだと実感しました。帰国した今もあの辛い食べ物が恋しくなりません。

留学は自分が思っている以上にプラスになるものです。日本にい

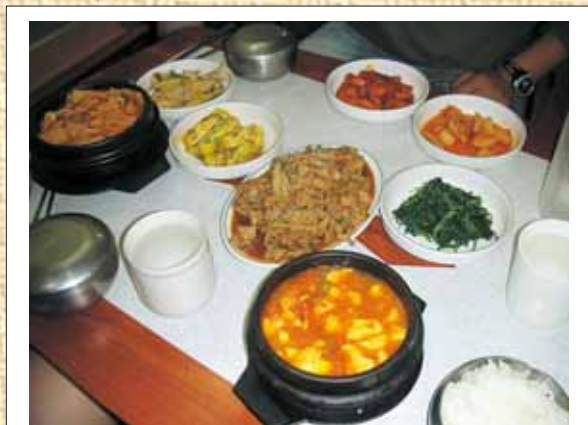
ても言葉は学ぶことができるし、インターネットや新聞で文化や社会事情も知ることはできますが、実際その国で生活することで比べものにならないほどの収穫があります。留学を考えているのならぜひ体力と時間のある学生の内に行く

ことをお勧めします。

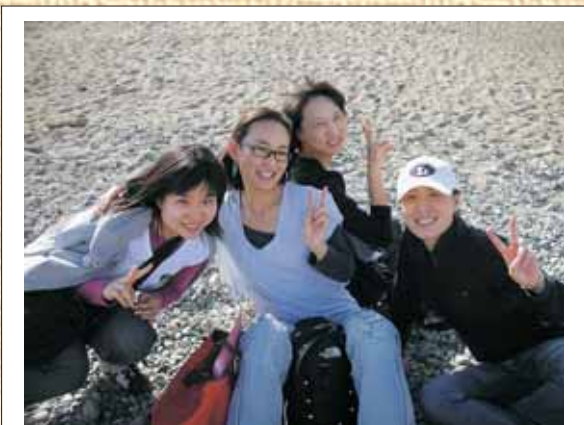
最後に、お忙しい中留学の手続だけでなく相談にもってくださった先生方、留学の機会を与え力になってくれた家族、励ましてくれた友達など、たくさんの方々に感謝申し上げます。



学校の本館。国際交流センターも中にあります。手前は花時計。



学校の近くの食堂で。400円くらいで食べきれない量のおかずが出てきます。



野外授業で海へ。一緒に写っているのは先生ですが、若くて綺麗な先生ばかりです！



IV けいじばんコーナー

1 平成19年度弘前大学学位記授与式

- ・学部 日 時：平成20年3月21日（金）午前10時00分～
場 所：弘前市民会館
- ・大学院 日 時：平成20年3月21日（金）午後 1時00分～
場 所：弘前大学創立50周年記念会館

2 平成20年度弘前大学入学式

- ・学部・第1部（人文・教育）
日 時：平成20年4月8日（火）午前10時30分～
場 所：弘前市民会館
- ・学部・第2部（医・理工・農生）
日 時：平成20年4月8日（火）午後 1時00分～
場 所：弘前市民会館
- ・大学院 日 時：平成20年4月8日（火）午前 9時00分～
場 所：弘前大学創立50周年記念会館

奨学金についてのお知らせ

◎ 日本学生支援機構奨学金

平成20年3月満期の皆さんへ

平成20年3月満期となり「返還誓約書」を提出済みの皆さんは、次のことに注意してください。

1 「各種願出用紙」について

「返還のてびき」のP20からの「各種願出用紙」様式を必ず確認し、該当事項がある場合は、様式をコピーまたは同様の書式で作成の上、日本学生支援機構へ提出してください。

「各種願出用紙」は日本学生支援機構ホームページにも掲載されています。

① 進学等で大学院等に在学する場合（留年を含む）

「各種届出用紙」の中にある「在学届」に必要な事項を記入のうえ、平成20年4月以降在学する大学（大学院）へ提出してください。

※平成20年4月1日以降に提出してください。

② 返還猶予を希望する場合

就職未定や病気などの理由により返還猶予を希望する場合は、「奨学金返還期限猶予願」に必要な証明書類を添付のうえ、日本学生支援機構へ提出してください。証明書類の詳細等については日本学生支援機構へお尋ねください。



- ③ 奨学金の返還を一部または全部を繰り上げて返還したい場合
「繰上返還申込書」に記入のうえ、日本学生支援機構あてFAXまたは郵送してください。

- 2 「リレー口座」で届出済みの金融機関を変更したい場合
「リレー口座」用紙を日本学生支援機構から取り寄せ、再度金融機関で届出てください。
(学生課にも若干予備を用意しています。)

現在貸与中の皆さんへ

- 奨学金の振込日について
奨学金の継続願を期限までにインターネットにより提出した人が、継続を認められた場合、4月21日(月)に4月分が振り込まれます。継続が認められた場合、特に通知はしません。
ただし、インターネットによる継続の手続きを忘れた場合や、修得単位数の不足などにより奨学金が停止・廃止となった場合は、振込がありません。
この場合、本人及び学資負担者にも通知します。

平成20年4月から奨学金を新規希望する皆さんへ

- 学部生
平成20年4月11日(金) 15:00から学部生2年次以上を対象とした説明会を実施する予定です。詳細は、3月下旬に掲示しますので掲示板に注意してください。
※新入生を対象とした説明会は「入学者案内」に掲載しています。
- 大学院生
新入生及び在学学生とも3月末～4月初旬に申し込み願書を配布します。詳細は3月下旬に掲示しますので掲示板に注意してください。

◎ **機構以外の奨学金制度について**

弘前大学に募集がある場合は、その都度一覧にして掲示しています。条件等をよく読み学生課窓口申し込んでください。
なお、大学を経由しない場合もありますので、各自治体のホームページなどに注意してしてください。

学務部学生課 奨学金担当 0172-39-3135

V 編集後記

学園だより第158号をお届けします。退職・卒業される皆様、ご多用中原稿をお寄せいただきありがとうございます。木々に目をやるとまだ堅いながらも蕾がふくらみ、長かった津軽の冬もようやく終わろうとしているのが実感できる時節となりました。

大学を去られる職員の方々は30年、40年という期間を弘前大学のために身を削る想いで勤めてこられたと思います。特に大学紛争時代の苦労話をうかがい、実際私は生まれてまもない頃なので実感はわかりませんが、大変な時代を経て、今の弘前大学があるのだということを深く胸に刻みたいと思います。

また、大学を卒業・修了される皆さんは、在学中に勉学・サークル活動等様々な経験をして成長し、また県外等からいらした学生さんにとって「弘前」が温かく、また帰ってきたいと思える「ふるさと」であってほしいと願います。

最後になりましたが、私は事務職員として学園だよりを2年間担当させていただき、氏家委員長はじめ各編集委員の御協力のおかげで新たな企画、レイアウトの刷新及び初めての広告掲載、また仕事がスムーズにできたことに感謝してペンを書きたいと思います。

(K・I)

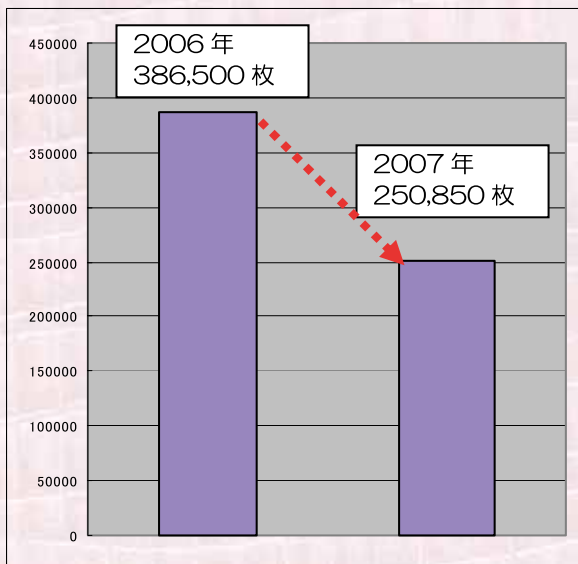


レジ袋使用削減活動へのご協力を感謝します

弘前大学生協は環境に優しいキャンパスをめざして、組合員や弘前大学とともに、2007年度の重点活動としてレジ袋の削減を掲げて取り組んで参りました。

5月の総代会でレジ袋の有料化（5円）を決定し、10月より実施した結果、12月までで昨年に比べ使用枚数を35%削減することができました。

【レジ袋使用量グラフ】



※レジ袋使用量は2006年に比べ13万6千枚の削減、金額で約33万円の節減となりました。

【節減効果の活用について】

レジ袋使用料節減効果33万円と、レジ袋利用者よりお預かりした4万円の合計37万円は、環境負荷軽減に係る活動の資金として活用を図ります。昨年のアンケートで要望が多かったのは次の項目でした。

- ①緑化など弘前大学キャンパスの環境対策に協力
- ②環境活動をしている諸団体へ募金等で支援

生協ではお金の具体的な活用方法について、2008年5月の総代会までに、組合員アンケートや総代会議の声を集め決定したいと思っています。上記要望を参考にぜひ皆様の意見をお寄せ下さい。

■次の方法で意見をお寄せ下さい。

- ①総代会向けの組合員アンケート
- ②総代会前の組合員会議や懇談会
- ③生協HP（下記）や店舗の一言カードへの投稿
(<http://www.coop.hirosaki-u.ac.jp>「一言カード」へ)

在学・在任中のご利用ありがとうございました

ご卒業やご栄転などで弘前大学を後にする皆様に、これまでご出資していただいたこと、沢山ご利用いただきましたことを深く感謝いたします。生協はこれからも学生や教職員組合員に支えられて成長できるよう頑張ります。ご来弘の機会にはぜひお立ち寄りをお願いいたします。

【重要】出資金返還手続きのお知らせ

生協ではただいま、出資金の返還手続きを案内しています。まだ手続きをされていない方はお忘れのないようお願い申し上げます。

- ①店舗で「出資金返還&身分変更申込用紙」に記入し手続きをして下さい。
- ②振込での返還になります。5月まで有効な金融機関口座を申込書にご記入下さい。
- ③3月末までの手続き者は、5月26日（月）付けの振込による返還となります。



※皆様のご利用でオープン・リニューアルした店舗
(上) シェリア (下) サリジェ



弘前大学 学園だより Vol. 158
2008年3月発行

学園だよりに関するご意見がございましたら、
下記のアドレスまでお寄せ願います。
e-mail jm3113@cc.hirosaki-u.ac.jp
弘前大学学務部学生課

国立大学法人 弘前大学
「学園だより」編集委員会
委員長
氏家良博(教育・学生委員会)
委員
渡辺麻里子(人文学部)
北原啓司(教育学部)
松谷秀哉(医学研究科)
鈴木光子(保健学研究科)
遠田義晴(理工学研究科)
比留間潔(農学生命科学部)
笹森利通(学生課)
石岡勝彦(学生課)
印刷：やまと印刷株